

20 世紀東アジア・キリスト教における他者認識の研究

－賀川豊彦をとりまく日本と中国、そして台湾の共鳴と反撥－

金丸裕一（立命館大学経済学部教授）

はじめに－問題意識と方法－

いま、東アジアの情勢に近年まれに見る緊迫感が蔓延しつつある。我々一般庶民レベルを「対立」の構図に巻き込む一大要因たる他者イメージの在り方の検討は、喫緊の課題であると言えるだろう。すなわち、ビジネスや学業のために直接海外との交流を体験していない人々であっても、報道やネット言説、更に口コミなどを通じて各々の心の中に漠然とした「他者」像が立ち現われ、好感や嫌悪感が隣人理解の行方を左右するが如き存在になって行くのである。

実は戦前・戦時期においても、類似した現象は多くの場面によって発生していた。筆者が特に注目したのは、自称・他称ともに「平和」かつ「愛敵」精神を信仰の要に据えた日本キリスト教界における他者理解の在り方である。欧米から伝来した宗教であるために、従来の数多くの研究において、アジアとの相互関連については等閑視され、あるいは宣教師により伝道された客体としての位置づけしか与えられなかった研究史的趨勢によって、日本・中国・朝鮮・台湾などが相互に取り結んだ関係性については、長年に亘って実証的な議論の対象外に置かれていた。

わたくしはこれまで、各教派から刊行された新聞、乃至は様々な主体が定期的に出版した雑誌類を体系的に調査する過程で、実はかなりのスペースがアジアに対する話題に割かれていた事実を発見した。大まかなところ、日清戦争・義和団事件・日露戦争・清末改革・辛亥革命・五四や五卅における排日気運・国民政府要人の基督教信仰・済南事変以降の和平問題・満洲事変・日中戦争・太平洋戦争勃発は、記事数が大幅に増加する契機となっている。特に 1930 年代以降は、日本による宣教によって欧米的基督教を凌駕せんという国策に乗じた活動方針が本格的に展開したため、記事のかかなりの部分が東アジアと関わる言説によって占められるに至った。幸いなことに現在、これらの多くがマイクロ化され国会図書館で閲覧可能であると共に、キリスト教主義大学図書館には数多くの関連文献が保管されている。

平時においての他者理解は、「愛」や「主にある兄弟姉妹」などと云う信仰的言表の範囲を逸脱していない。だが次第に「日本基督教」に対する拒絶を示す相手側に対して、日本の教界は欧米隷属の擬似信仰、乃至は「小乗基督教」等という汚名を被せ、排除こそが信仰的正義であると説くに至った。敗戦という現実を前に、日本基督教界が目指し

た「大東亜神学」樹立構想は頓挫して、更にこれに直接・間接に関与した教界関係者も口を閉ざす。再度、欧米的な「平和」や「愛」の看板を掲げることにより往時の行為は忘却されるかに思われたが、単なる戦争責任云々の次元ではなく、一連の動向の観察は、以下の如き重要な現象を解明する鍵となる。

①「愛」や「平和」という信仰的タームを用いて、如何にして他者排除の論理が語られたか。

②言説と行為との間に、どれほどの距離が存在していたのか。

③同時代の東アジアキリスト教界の他者理解との間に、共通性や相違点は存在しているのか否か。

本研究は、以上の諸問題への実証的議論を深化させるためになされる試論でもある。

次に、この研究が主として依拠する史料について、簡単に紹介しよう。

相互イメージの在り方を考察するとき、従来の標準的な手法では著名文化人や政治家など、記録を作成し得る立場にある人物に事例を求める方法、乃至は新聞報道や世論調査結果に代表される匿名の「マス」を論拠とする研究事例が多かった。これは、史料状況からしても自然な現象であるが、今回の研究が主たる考察対象とするキリスト教関連の新聞や雑誌は、かなり個性的な存在である。

第一に文書伝道という伝統を踏襲して、各会派や YMCA などの団体は、概ね週刊乃至は月刊で多種多様の新聞・雑誌類を刊行し続けていた。各個教会も、『週報』に代表される定期的な刊行物を有しており、同一主体が記録し続けた史料が蓄積している状況がある。しかのみならず第二に、これらにおける書き手は、単に著名な指導者や神学者、牧師など指導者層のみならず、長老（役員）や平信徒など様々な立場の人物が固有名詞を以て登場している。女性がペンをとった事例も少なくない。

加えて第三に、これらに記録される人事動向などには、発言のみならず実際の行動も逐一詳細に記録されており、特定の人物や問題に対する時系列的、或いは横断分析的考察を行う際、非常に優れた史料群となるのである。

同様の傾向は、近代中国の各会派による刊行物、また各ミッションが刊行した英語雑誌などにも共通して見られ、これらの情報を丹念に発掘すれば、所謂「草の根」的個々の心性に対しても肉薄することが可能となり、キリスト教徒という限定からは逃れられないものの、双方向から見て優れて実証的な言説／行動の解明が可能となるであろう。

こうした手法を用いながら、本稿では 20 世紀において最も「著名」だった日本人クリスチャン賀川豊彦をとりまく日本と中国、そして台湾における評価が如何に共鳴／反撥したのかについて、通史的な分析を試みたいと思う。

第Ⅰ部 賀川「秘話」のあらまし

第一章 宋美齡・蔣介石と賀川豊彦をとりまく「秘話」の梗概

近代日本の諸分野において開拓者的役割を果たした賀川豊彦（1888～1960）ではあるが、不思議なことに近年に至り陸続と刊行されている人物評伝シリーズ（吉川弘文館・ミネルヴァ書房・山川出版社）において、彼を対象とした作品は未だ公刊されていない。歴史研究者側の怠慢が為せる結果と読むことも可能かも知れないが、脚下照顧、賀川研究者の側にも大きな責任があるのではなかろうか。それはすなわち、信仰告白、あるいは宣教論的なロジックによって支えられて語られた言説と、歴史学、乃至は人物史研究としてのそれとを峻別せずに「史実」と看做した過失である。

筆者は、賀川豊彦と中国との関係の変遷を考察する過程で、神の国運動を契機に賀川の側近兼秘書的な存在となり、生涯にわたってその役割を担い続けた黒田四郎（1896～1989）が発信した戦時期「秘話」に着目した。まず、鍵となる部分を、やや長いが『湖畔の声』第726号（近江兄弟社湖声社、1977年1月）に掲載された初出テキストを用いて紹介しよう。

私は昭和十四年十二月十二、三日頃、中国の首都南京の隅で、茫然自失、ノイローゼ気味で悶えていた。その時私は日本のキリスト教界から、代表者として送られて来て、南京に着いたばかりであった。それより二年前の昭和十二年十二月、日華事変で日本軍が南京を占領したが、入城後数日、恐ろしい南京事件が勃発した。日本軍のある部隊によって三十五万の中国市民が虐殺され、三万五千の中国女性がおかされたのである。

それ以来二年たったその頃一旗組と言われるひどい手段で金を儲けようとする人が多く進出して来た。その人達を導いて、余り悪いことをしないように導くために私は送られたのである。一二日南京の焼けただれた跡や中国の人達の貧乏極まる姿を見て、私は心ひしがれ、どうしていいか解からなくなったのである。

ちょうどその時、重慶から蔣介石総統の夫人宋美齡女史の言葉が放送された。それは、『日本人は憎い。日本軍の暴虐はどうしても許せない』というのである。ほんとうにそうだと私は更に心をしめつけられた。すると驚いたことに、次に『しかし、私はどうしても神さまに日本を亡ぼして日本人を皆殺ろしにして下さいとは祈れない！』という言葉がつたわって来た。驚いて信じられぬと思っていると、『それは日本には、今日も私共中国と中国人とのため熱涙をながして祈っているドクターカガワがいるからである』と放送された。

その時私は宋美齡女史の言葉に励まされて元気を出してやっと立ち上がることが出来た。それから六年後の昭和二十年、私共はとうとう完全に敗北して、武力も権力も金力もないあわれな亡国の民と化し、死の恐怖に包まれていた。すると今度は蔣介石総統の言葉が放送された。『仇に報ゆるに仇をもってせず、中国全土の日本人を一人残らず安全に本国へ送り帰せ。これに背く者は厳罰に処する』という、これこそ驚くべき布告である。

然しそれは夢ではなく、完全に敗北した私共は、殆ど全部安全に故国に帰ることができたのである。ほんとに賀川先生の存在が、何百万の日本人を救う貴い働きをなし遂げたのである。普通の日本人はこのことを全く知らないが、厳然たる事実である。

そして今や賀川先生召天後十六年を経てしまったが、先生の言葉『愛の祈りは世界を動かす』が、一つの観念や理論ではなく、世界史的な現実において実証された活ける真理であることに心を打たれるのである¹。

中華民国の最高権力者であった蔣介石（1887～1975）夫人の宋美齡（1898～2003）が戦時中、賀川の信仰に感服して日本の滅亡を祈る事ができず、やがてこれが「以德報恩」として知られる戦後の対日寛容政策を生んだという筋書きを骨子とする「秘話」は、表1に示す系譜で次第に人口に膾炙するようになった。

表1 「秘話」伝承の主な系譜

	著者	タイトル	出典	刊行年月	備考
1	黒田四郎	賀川豊彦と世界平和(1)	『湖畔の声』第726号、4～5頁。	1977年1月	近江兄弟社湖声社発行。
2	黒田四郎	世界を動かした賀川先生の祈り	『クリスチャン・グラフ』第384号、9頁。	1978年7月	田中芳三編、クリスチャングラフ社刊行。
3	加藤正義	『日本を今日あらしめた蔣介石総統の恩情』	刊行元など不明、7頁。	1978年4月以降。	伝道トラクト。
4	三浦綾子	祈りは世界を変える	『天の梯子』主婦の友社、168～170頁。	1978年12月	77年1～12月の初出には記述なし。
5	黒田四郎	私だけしか知らない世界史秘話 日本の運命を大きく変えた人物たちの話(三)	『クリスチャン・グラフ』第430号、22～23頁。	1982年6月	田中芳三編、クリスチャングラフ社刊行。
6	黒田四郎	賀川豊彦と世界平和	『私の賀川豊彦研究』キリスト新聞社、	1983年5月	

¹ 黒田四郎「賀川豊彦と世界平和(1)」(『湖畔の声』第726号、1977年1月)4～5頁。

			10～11 頁。		
7	佐伯孝典	賀川豊彦における戦争と平和	『土着と挫折』新教出版社、66～67 頁。	1991 年 5 月	
8	久保有政	『この人の生涯に学ぶー信仰と愛に生きた 11 人』	レムナント出版、72～91 頁。	1994 年 5 月	蔣介石のみで、賀川には言及せず。
9	加藤 重	『わが妻恋しー賀川豊彦の妻ハルの生涯』	晩聲社、240～241 頁。	1999 年 3 月	
10	小南浩一	戦時下賀川豊彦の思想と行動	『北陸法学』第 9 巻第 2 号、56～57 頁。	2001 年 9 月	黒田四郎は引用せずに立論。
11	黒田 絢	黒田四郎	『イエスの友会人物伝』、60 頁。	2004 年 11 月	
12	浜田直也	賀川豊彦	『孫文研究』第 42 号、65 頁。	2007 年 9 月	
13	野尻武敏	賀川豊彦の友愛互助の精神ーその今日的意義	『滋賀の生協』第 149 号。	2009 年 10 月	インターネット版。
14	徐 亦 猛	日中キリスト者の平和思想の比較	『東アジアにおける平和と和解』、かんよう出版、227 頁。	2019 年 6 月	
15	伴 武澄	スラムの聖者、賀川豊彦（夜学会 243）	萬晩報、2022 年 6 月 3 日。	2022 年 6 月	インターネット版。

（出典）それぞれの論著に基き、筆者が作成した。

第二章 「秘話」の継承過程について

そもそも戦前期において、特に蔣介石による北伐成功（＝ストロングマン化）に継ぐ「受洗」に際して、日本人クリスチャンからは好意的な観察も寄せられた。しかし 1937 年以降は、敵の頭目としての扱いに終始する。これが 1945 年 8 月以降になると一転したのだ。単なる敗戦ショックのみならず、より現実的な問題として大陸や旧「外地」在留邦人の行く末が絡んでいたからだろう。

例えば四半世紀有余を北京で過ごした清水安三（1891～1988）は、国家権力の支えを必要とせずに日本人が個人として丸腰で現地での活動を継続することに期待を寄せたが²、国共内戦の混乱下にある大陸情勢は緊迫していった。

こうしたなか、賀川主宰の『世界国家』第 1 巻第 5 号（1947 年 11 月）には、蔣介石「暴を以て暴にむくゆるなかれ」が掲載され、信仰による愛敵精神といったロジックが

² 清水安三「中日関係の過去及将来」（『世界国家』創刊号、1947 年 1 月）21～22 頁。

強調されている（7頁）。ちなみに、日本敗戦に際する蒋介石「告文」については、既に「報復企図せず／蔣主席放送」（『朝日新聞』1945年9月13日、東京本社版朝刊、1面）、「蒋介石－暴にかふるに寛容」（『政経時潮』第9号、1946年11月）などで報じられていたため、世間でも比較的知られていた内容だと考えて良いだろう。宋美齡夫人ともどもメソジスト教会に属する信徒であったため、その決断の根底に「愛敵」を見いだしたことも、クリスチャンとしてごく自然な解釈といえる。

再び表1に戻ろう。1970年代後半から80年代の初めにかけて、黒田四郎によって語られはじめた感動的ストーリーは、ほぼ同じ時期から牧会者である加藤正義（1914～2004）や既にクリスチャン作家として名声を博していた三浦綾子（1922～1999）らも語り継ぎ、1990年代以降になると単に信仰的な言説に留まらず、誠実な実証研究をおこなう学者の間でも影響力を持つようになった。以下、時系列を意識しながら、表1に列挙された幾つかの内容をざっと眺めておこう。

第一に、長らく賀川とともに過ごした黒田四郎が「実体験」として発信した言説は、近江兄弟社が発行する月刊誌『湖畔の声』誌において1977年1月に誕生した。黒田はその後大阪で刊行された『クリスチャン・グラフ』誌で類似した語りを繰り返し、更に『私の賀川豊彦研究』（キリスト新聞社、1983年）巻頭にこの印象的エピソードを置いた。結果的に同書が現在に至るまで根強い影響力を有していると思料されるも、当該部分の叙述は『湖畔の声』における初出と殆ど同一である。

第二に、1978年前後に黒田以外の語り部たちも、同様の証言を語りはじめたことを銘記せねばならない。例えば三浦綾子の場合、黒田が証した宋美齡の役回りが何故かしら蒋介石によるそれに入れ替わっているものの、戦後の「以德報恩」政策の本質的原因は賀川の「祈り」にあった³、と主張する。のみならず、敗戦後の日本を救った功績は賀川の信仰に帰さねばならぬと暗示したのであった。もっとも、1977年1月から12月にかけて合計11回にわたり『主婦の友』誌に連載された初出において当該エピソードは登場しないので、この部分は連載終了後の短い期間に加筆されたものと推測される⁴。

第三に、主として牧会の現場にある人々の間でも、同じ時期から類似した「秘話」が宣べ伝えられる。その代表的な事例は、加藤正義『日本を今日あらしめた蒋介石総統の恩情』と題されたトラクトである。筆者の手元にある版には奥付が印刷されていないので、刊行元や刊行年月を確認することはできないが、本文中に「蒋介石総統昇天三周年記念礼拝」に参加した際の状況が紹介されており、1978年4月以降に作成された事実

³ 三浦綾子『天の梯子』（主婦の友社、1978年）168～170頁。

⁴ 三浦綾子「天の梯子」（『主婦の友』第61巻第1号～第12号、1977年1月～12月）の場合、単行本と同じく「祈りは世界を変える」という副題が記された第11回（最終回）において防府教会の伊藤栄一牧師をめぐるエピソードが語られるが、宋美齡や蒋介石には全く触れられていない。

が判明する。この小冊子の内容は三浦綾子「祈りは世界を変える」と共通する部分も多いが、戦時中に済南日本人教会を牧した向井芳男（1906～1973）牧師の夫人である向井仙子（生没年調査中）師母による実体験を以て、蒋介石の「恩情」を生んだ賀川による「愛の禱告」の意義を強調する点など、細部には若干の相違も見られる。尚、このトラクトには敗戦時に蒋介石が寛大政策を命じた「告文」和訳も附され、「歴史的事実」として当該事象を伝えんとした姿勢が看取できる⁵。

このように、1970年代後半に突如として誕生した「秘話」ではあったが、1990年代以降になると単に信仰の現場だけではなく、キリスト教史研究の領域においても影響力を発揮し始めた。表1の7以降に整理したものが、その主だった事例である。

例えば、賀川豊彦と「平和」の関係性について批判的な分析を加えた佐伯孝典を筆頭に⁶、加藤重による賀川ハル評伝⁷、近年では徐亦猛による日中両国パシフィスト比較研究⁸に至るまで、優れた実証研究であっても「歴史秘話」を所与の前提として議論している事実注目されたい。

殊に日中関係史と賀川豊彦の事蹟をトレースする先駆的な研究を主導した浜田直也ですら、「宋美齡は、日中戦争中の1939年に重慶からの中国国民向けラジオ放送において、『賀川先生がいる限り日本人全体をうらむことはできぬ。』と語っている。彼女の賀川への信頼は戦争の憎しみをも超越する程強かったのである」と語り⁹、「秘話」の歴史的事実性の判断を慎重に回避する叙述に徹した小南浩一の研究¹⁰を例外に、黒田四郎「回想」の猛烈な浸透力が確認できるのであった。

⁵ 加藤正義『日本を今日あらしめた蒋介石総統の恩情』（刊行年など不明）6～8頁。なお、「編集室より」（『クリスチャン・グラフ』第495号、1988年5月、7頁）では、加藤のトラクトが発行された旨の案内が記載されているが、それが初版なのか再版なのかといった詳細は不明である。

⁶ 佐伯孝典「賀川豊彦における戦争と平和」（同『土着と挫折－近代日本キリスト教史の一断面』新教出版社、1991年）66～67頁。

⁷ 加藤重『わが妻恋し－賀川豊彦の妻ハルの生涯』（晩聲社、1999年）240～241頁。

⁸ 徐亦猛「日中キリスト者の平和思想の比較」（福岡女学院キリスト教センター・徐亦猛編『東アジアにおける平和と和解－キリスト教が貢献できること』かんよう出版、2019年）227頁。

⁹ 浜田直也「賀川豊彦」（『孫文研究』第42号、2007年）65頁。

¹⁰ 小南浩一「戦時下賀川豊彦の思想と行動」（『北陸法学』第9巻第2号、2001年）56頁。

第三章 「秘話」が「正史」に転ずる危険

これが、近年とみに影響力を発揮するネット空間の言説では、更に深刻な状況になっている。幾つかの事例を紹介してみよう。

経済政策論専攻の神戸大学名誉教授であり、ひょうご震災記念 21 世紀研究機構顧問・生活協同組合コープこうべ協同学苑学苑長を歴任した野尻武敏は、「蒋介石の奥さんの宋美齡は、浙江財閥の娘さんでクリスチャンでしたが、この人が『日本人は憎い。皆殺しにしたい。しかし皆殺しはできない。日本人の中に賀川という人がいるから』と言ったということです。あの戦争の中で、中国にも賀川先生の信奉者がいたということです」¹¹、と述べる。

また、東京外国語大学中国語学科卒業後に長らく共同通信社に勤務し、現在は高知市会議員として活躍する伴武澄も、「アジアでの活動で満州事変以来の日本軍の中国侵略について、『謝罪』したことから、蒋介石政権からも評価され、宋美齡夫人は『日本を憎み切れないのは賀川先生がいるからだ』と語ったとされる」と述べ¹²、社会的にも一定の影響力を有する方々による言説であるが故に、「秘話」の真実化に対する裏書きとなるだろう。

さらに、初出年月が不明であるため表 1 には収録しなかったが、信徒を主な読者とするネット記事には、蒋介石「告文」を題材とした以下の如き記事が確認される。

この告文を読んで、わたしは「蒋介石総統という人は、りっぱなクリスチャンの指導者じゃ。総統は日本の大恩人じゃ」と言っていた母の言葉をいまさらながら思い出します。第二次世界大戦で最大の被害を受けた中国の日本に対する「戦後賠償」要求放棄を宣言し、しかも他の被害国にも「戦後賠償」をしないように促し、イエスのことば「汝の敵を愛せよ」を実行した蒋介石総統の信仰と愛に心から驚きました。戦勝国も敗戦国も自国民に声明を発表していますが、蒋介石総統の告文に込められた愛のその凄さには圧倒されました。蒋介石総統のおかげで、日本は戦勝国による日本国土四分割占領を免れ、被害国に対する天文学的数値に上る「戦後賠償」の支払を免れたのです。蒋介石総統は、なぜそこまで日本をかばってくれたのでしょうか。彼の言葉によれば、「かつて私が日本滞在中に非常にお世話になり、心から尊敬してやまない賀川豊彦先生のおられる日本を滅ぼすことは、私には到底でき

¹¹ 野尻武敏「賀川豊彦の友愛互助の精神」（『滋賀の生協』第 149 号、2009 年 10 月）。
[https://shiga-seikyoren.org/action_report/other/005433.php：最終閲覧日 2025 年 12 月 30 日]

¹² 伴武澄「スラムの聖者、賀川豊彦 夜学会 243」（萬晩報、2022 年 6 月 3 日）。
[<https://yorozubp.com/wp/2022/06/03/kagawa-10/>：最終閲覧日 2025 年 12 月 30 日]

ないことである」ということです。「世界のカガワ」と言われたクリスチャンの社会運動家・賀川豊彦の信仰と愛が蒋介石総統の心を動かしたのでした¹³。

如上のあらましからも、宋美齡の信仰告白や蒋介石の「告文」や「以德報怨」政策という史実を巧みに組み合わせ、かつそれらを賀川豊彦と関連付けて解釈した物語は、ともすれば「実話」と看做される危険性が益々高まっている実態が判明するだろう。

だが、これらの「感動的美談」あるいは「歴史秘話」は、言説を支える論拠の問題、更に中国近代史や日中関係史の研究が明かした知見を加えて熟考すると、不自然な部分が多いと言わざるを得ない。以下に、その疑問点を列記してみよう。

第一に、1939年12月の中国大陆という「時」と「場」を巡る考察が極めて弱い。戦時下中国のキリスト教信仰の在り方、より広範に近代中国史や日中関係史総体の中で、この「出来事」を検討することが必須であろう。

第二に、黒田「証言」自体を再度精査する必要があるだろう。周知の通り彼は、神の国運動以来ずっと賀川に寄り添い仕えた実績があり、近しい立場から記録された素材である。黒田をめぐる直接・間接の史料も比較的豊富であるから、同時代の発言との距離を測定した上で、その妥当性が検討されるべきだろう。

第三に、「賀川の祈り」を通じて「愛敵」に導かれたとされる蒋介石や宋美齡について、中国側の記録による裏付けを取らなくてはなるまい。欧米から新生中国のストロング・マンと目されていた蒋介石は、宋美齡と結婚後の1930年10月23日にメソジスト教会の江長川牧師(1884-1958)から受洗している。権力掌握後の二人の日常については詳細な実録が作成・公開されており、かかる逸話をめぐる史実の確定は比較的簡単な作業であると思われるからだ。

続く第Ⅱ部では、これを念頭に置いて文献実証的な探究を進め、戦時日中キリスト教関係史の解釈に対して一石を投ずるための作業を、唯一の課題として設定する。

¹³ パウロ・アカギ・カズヒコ「戦争と平和 8」(BMP 文庫、掲載年月日など不明なるも、連載記事中で時折記された日付から推測すると2006年か2007年)。

[<http://bmp.jp/books/08.htm> : 最終閲覧日 2025年12月30日]

第Ⅱ部 戦時下における展開

第四章 黒田四郎の南京時代をめぐって

日中開戦直後の南京におけるキリスト教信仰の在り方については、現地側／宣教師史料を批判的に活用した張連紅による研究を通じて、具体的展開を知ることが可能である¹⁴。また、占領下南京における日中キリスト教関係史については、木村茂三郎¹⁵や犀川一夫¹⁶による回想の他、海老沢義道¹⁷や新堀邦司¹⁸のYMCA史研究でも触れられてはいたが、分析的な見解の提示までには若干の距離があった。だが近年、渡辺久志による南京難民区国際救済委員会研究を嚆矢として¹⁹、松谷曄介による南京中華基督教団をめぐる研究²⁰、森田喜基による日本支配下キリスト教社会事業史をめぐる論考が誕生した²¹。

周知の通り、1937年7月に始まる日中戦争は、同年12月の南京陥落後にも止むことはなく、やがて「戦略的対峙」段階を迎える。38年6月の黄河決壊作戦、9月以降の広州・武漢の陥落、11月の長沙大火、12月の汪兆銘の重慶脱出、39年1月からの臨時首都・重慶空爆、5月のノモンハン事件、6月の天津英国租界封鎖など、戦線拡大と泥沼化の状態に置かれた。これと並行して南京には、1938年3月に中華民国維新政

¹⁴ 張連紅「基督的力量：南京大屠殺期間難民的宗教生活」（黄自進・潘光哲主編『中日戦争和東亞變局』上冊、稻郷出版社、2018年）。和訳には、張連紅著・土肥歩訳「南京大虐殺と難民の宗教生活」（波多野澄雄等編『日中終戦と戦後アジアへの展望』慶應義塾大学出版会、2017年）がある。

¹⁵ 木村茂三郎『昭和の東京YMCA』（東京キリスト青年会、1966年）。特に、第一二章と第一三章が南京での回想に充てられている。

¹⁶ 犀川一夫『門は開かれて』（みすず書房、1989年）。うち、第三章が軍医として中支滞在時の回想である。

¹⁷ 海老沢義道『斎藤惣一とYMCA』（斎藤伝記念出版委員会、1965年）。

¹⁸ 新堀邦司『青年の使徒－井口保男伝』（日本YMCA同盟出版部、1985年）。

¹⁹ 渡辺久志「南京国際救済委員会に派遣された日本人 安村三郎」（『季刊戦争責任研究』第58号、2007年）。

²⁰ 松谷曄介「南京大虐殺後の日中教会－南京中華基督教団における楊紹誠と黒田四郎」（『福音と世界』第67巻第8号、2012年）。また同『日本の中国占領統治と宗教政策－日中キリスト者の協力と抵抗』（明石書店、2020年）。

²¹ 森田喜基「戦時下南京における日本人キリスト者らによる伝道と社会事業」（『頌栄短期大学研究紀要』第41巻、2017年）。

府、40年3月には「和平・反共・建国」を謳う汪兆銘の中華民国国民政府という対日協力政権が組織され、日本主導での統治が進められる。1941年12月の太平洋戦争勃発以前の段階においては、上海共同租界は健在であったため、「国都」でありかつ英米との接点も多い南京は、日本側にとっても重要な拠点であり続けた。別言すれば、最前線からは距離感があり、相対的「平和」を迎えんとする時点で、黒田は南京に赴任したのであった。

ここで簡単に、牧師・黒田四郎の横顔を紹介しよう。1896年に生まれた彼は、中央神学校卒業後、日本基督教会二宮教会と岐阜教会を牧会した。1928年より賀川が主導した神の国運動に参加、その片腕として各地の伝道に同行。39年には日基より南京に派遣された。敗戦・帰国後は日本基督教団東駒形教会牧師として、賀川の事蹟の広報に尽くす。84年にはキリスト教文化功労者として表彰され、89年に歿した。

戦時の黒田は如何に過ごしていたか。1931年9月の満洲事変を契機とした時局の動揺にあって、彼は次のように述べる。「日本を列強に最後の勝利を得しむる位しては、実に最微者を救はなければならない。この意味に於て、最も弱い者を助けて、これに奉仕する人は、日本の生命線を護る人道の勇士である。弱者などはどうでもよい、金さへ儲ければよいといふ考えも、また弱い者は殺してもよい、理想の社会を打立てようといふ革命思想も、共に日本を亡ぼすものである。……最微者を救ふ運動に参加する者は幸である」²²、と。ここでいう、「最微者」が国内の弱者を意識して述べられたのか、あるいは国際的な状況をも視野に収めてなされた発言であるのか不明確であるが、神の国運動を指導する働きの中で「弱者への奉仕」という基本姿勢は確固たる信念となっていたようだ。

37年7月の日中戦争勃発後、黒田が所属した日本基督教会も他の教団・教派と歩調を合せて、皇軍慰問など華北を中心に活動を展開、やがて「北支伝道」に乗り出す²³。苦難の現場に向かう姿といえば恰好が良いけれども、南京伝道が志向された1939年の歴史的段階性については、より冷徹な考察が必要となる。すなわち、市街戦で混乱を極めた中華民国の首都・南京の「復興」事業が日本軍、及び動員された官民諸団体、対日協力政権側によって進められ、都市機能を支えるインフラの再整備、更に食糧など生活必需品をそれなりに供給できる体制の確立が、ちょうどこのタイミングであった。表2に見られる通り、南京へと移り住む民間人も急増した。ちなみに、在留邦人の活動を側面支援する南京日本商工会議所の成立も、39年10月29日のことであった²⁴。この空

²² 黒田「最微者を救へ」（『火の柱』1934年12月10日）1頁。

²³ 「在北支那人伝道定礎」（『福音新報』1938年2月10日）1面、「大陸伝道の急務と其意義」（『福音新報』1939年5月25日）1面など。

²⁴ 戦時南京における日本人の問題については、拙稿「南京日本商工会議所、市来義道と『姜魏堂』」（『立命館経済学』第57巻第2号、2008年）を参照。

前の南京ブームがあったればこそ、教界側からも伝道が模索されたのである。

表2 南京在留日本人の人口統計－1934年～1944年－

(単位：人)

	内地人	朝鮮人	台湾人	合計
34. 6	125	95	32	252
35. 10	130	240	33	403
36. 1	133	240	32	405
37. 7	163	243	38	444
37.10	不明	不明	不明	不明
38.10	2,590	292	30	2,912
39.10	6,908	376	295	7,579
40.10	10,038	476	579	11,093
41.10	17,964	1,942	849	20,755
42.10	20,716	1,653	1,103	23,472
43.10	19,300	941	1,401	21,642
44. 7	19,472	1,089	1,389	21,950

(出典) 拙稿「南京日本商工会議所、市來義道と『姜魏堂』」(『立命館経済学』第57巻第2号、2008年)表1、及び「南京在住邦人人人口月別統計表」(『南京』南京日本商工会議所、1941年)622～623頁より作成。

39年10月6日から9日にかけて開催された日基第五三回大会記録において、次の事実が判明する。①大会常置委員会では、現地からなされた開拓伝道の要請に対して、取り敢えずは南京で、将来的には漢口においてもその意思がある旨を回答、同年8月4日に大会議長・富田満名義を以て「南京第一日本人基督教伝道所」設置の請願を提出した²⁵。②南京伝道は上海教会によって着手されていたが、同教会が所属する東京中会に加えて非常時特別伝道委員会も「幾分の資金」を支給する事とした。さらに上海教会から主任者の派遣を求められ人物銓衡を進めた結果、黒田の派遣を決定した²⁶。しかしながら、③翌年以降は、「中支に伝道は伝道局をして取扱はれるを妥当と認め、この事を同局に

²⁵ 「第九 大会常置委員会報告 (十四) 中支伝道の状況」(『昭和十四年度 第五十三回日本基督教会大会記録』日本基督教会大会事務所、刊行年不明)28頁。

²⁶ 「第十一 昭和十四年非常時特別伝道委員会報告 (四) 南京伝道と北支伝道」(同前)33～34頁。

申入るる筈」であり²⁷、「刻下の急務」とされた伝道具体策についても「適当な方策を採る」旨が漠然と記されるだけであり²⁸、丁寧に練られた計画とは程遠い感がある。

他方、黒田に与えられた責務は重かった。すなわち任命に際して、①年齢は四〇代、②合同教会の運営に適し、③西洋人との交渉を円満にできる者という条件に加えて、④堅実に教会を建設すること、⑤会堂を早く建築すること、⑥支那人の教育機関を開始すること、⑦社会事業に対する経験乃至は見識を有するという、様々な条件を満たすと人物だと期待されたのである²⁹。そして日基大会の議場で列席者に紹介され祝禱で送り出された後³⁰、11月8日には神戸から上海へと出航³¹、14日には南京に到着して太平路二三五号の多田洋行内に仮寓した³²。続いて15日に祈祷会、16日は総司令部や憲兵司令官などへの訪問、17日に報道部長馬淵大佐による招待会、18日には中国人教会のメンバーを招待、19日に最初の礼拝、12月4日には総領事館による宣教師の招待と、その多忙さが窺い知られる³³。なお別の史料によれば、11月26日に最初の礼拝を執行、「神の子羊」と題した説教を行い一六名の列席者が与えられた、と記録される³⁴。

ところで赴任後の黒田は、折にふれて近況を報告した。表3にその状況を整理してみよう。ここには、戦後における「回想」も附記しており、見落としが残る可能性はあるも概況を知るには十分な素材だろう。

表3 黒田四郎による南京の「報告」／「回想」

	執筆時期	表題	出典	備考
1	39.10.9	熱誠の嵐の中に東亜伝道部生まるー 黒田氏送別会	『火の柱』123、39.11.10(3)	報道記事
2	39.12.13	南京だより	『火の柱』125、40.1.10(4)	手紙
3	39.12 末	南京伝道報知	『福音新報』、40.1.11(8)	

²⁷ 「第九 大会常置委員会報告（十四）中支伝道の状況」（同前）28頁。

²⁸ 「第五十二 十五年度非常時特別伝道案（七）満蒙支那大陸及び外地への伝道」（同前）101頁。

²⁹ 「新支那教化の開拓使命を帯びて南京赴任の黒田四郎先生 振起修養会に抱負を語る」（『火の柱』第122号、1939年10月10日）2頁。

³⁰ 「第七十九 黒田四郎議員の紹介」（前掲『昭和十四年度 第五十三回日本基督教会大会記録』）183頁。

³¹ 「黒田四郎氏大陸伝道へ挺身」（『神の国新聞』1939年11月1日）7面、及び「個人消息」（『福音新報』1939年11月16日）10面。

³² 「個人消息」（『福音新報』1939年11月23日）10面。

³³ 黒田「南京だより」（『火の柱』1940年1月10日）4頁。

³⁴ 「個人消息」（『福音新報』1939年12月7日）10面。

4	40.1.27	南京に於ける聖戦第一線の通信	『火の柱』126、40.2.10(2)	手紙
5	40.1.27	興亜の精神は先づ精神から－イエスの友よ立て	同上	K S 生 名 義
6	40.2.7	開拓者精神に立て	『開拓者』35-3、40.3.1(20~21)	
7	40.2.?	無題（イエスの友興亜伝道後援会宛）	『火の柱』127、40.3.10(4)	手紙
8	40.10.?	南京だより	『福音新報』、40.11.7(10)	手紙
9	40.12.28	祈に答へて更に前進	『火の柱』137、41.1.10(8)	手紙
10	41.1 初	南京だより	『福音新報』、41.1.23(9)	手紙
11	44.夏	大和の基調	『長江青年』44、44.9.20(1)	
12	45.初	凡ての事をなし得るなり	『長江青年』48、45.1.20(1)	
13	45.前半	中支に賀川研究会生る	『火の柱会報』2、45.7.?(5)	
14	64-65 年	牧会四方山話	『恩寵の実験室』、90.9.18	86-88 頁
15	60 年代末	人間賀川豊彦	キリスト新聞社、70.9.1	221-223 頁
16	49~70 年 頃	主は生きておられる－大戦下南京伝道の奇跡	黒田会、89.4.2	11-13 頁
17	76 年末	<u>賀川豊彦と世界平和(1)</u>	『湖畔の声』726、77.1.1	4-5 頁
18	77~78 年	<u>世界を動かした賀川先生の祈り</u>	『クリスチャン・グラフ』 384、78.7.10	9 頁
19	80 年代初	<u>私だけしか知らない世界史的秘話 日本 の運命を大きく変えた人物たちの話、(一) ~(三)</u>	『クリスチャン・グラフ』 428~430、1982.4.1~6.1	(一)、11 頁
20	80 年代初	<u>中日平和と賀川先生の貢献</u>	黒田会、90.6.1	18 の再録
21	80 年代初	<u>私の賀川豊彦研究</u>	キリスト新聞社、83.5.1	10-11 頁、 17 を再録
22	83 年	わが生涯を語る	日本クリスチャンペンクラブ出版部、84.8.1	8 頁
23	不明	聖手に導かれて－黒田四郎米寿記念誌	黒田会、84.?.?	筆者未見

（出典）各史料に基いて筆者が作成した。

（註）下線部がある作品にのみ、南京でのラジオ放送エピソードが叙述されている。

10 月 9 日、「大陸へ渡るなら一生を埋めるのでなければいけない。そして日華のくさびとなり給へ」という賀川からの餞の言葉を噛みしめ、大陸赴任は神による「召集令状」に相違ないと解釈した黒田は、「生を賭して贖罪愛の福音の宣伝と生活化に突進」する

旨、同仁たちに決意を述べた³⁵。到着直後の南京は、「まだまだ復興し始めたばかり」の「荒れ果てた町」であり³⁶、軍人と「支那人」の多さとともに「戦地だといふ心持は日がたつにつれて一層はつきりとして来」た事を報告、自らの姿を「開拓伝道者」ではなく「従軍伝道者」に喩えている³⁷。

時に支援者に向かって、「殊に何の予備智識もなく大陸に渡り、南京の現地にたゞずみ、敵視と侮視と邪魔者扱いと各方面の妨害の包囲を受けつゝ、小さい力を嘆きつゝ戦つて」いると弱音を吐く黒田ではあったが³⁸、39年クリスマス前の報告によって「孤立無縁」状況とは距離があった状況を窺い知ることができる。下記を一瞥されたい。

十一月十日上海に上陸して、上海日本人教会の中澤牧師、井田副牧師、白井少佐等に迎へられた。其夜上海基督教聯盟の組織準備会があつたので、列席して、中支の色々な事情を大体知ることが出来た。上海日本人教会は非常な発展振りを示し、南京伝道に対しても多大な準備と援助とをつゞけて下さるのを目のあたりに見た。然も中支宗教大同盟基督教部主事斎藤末松氏も、大阪より来任されて間もない故に最初の南京ゆきを試みられるよし、青年会の安村、末包両氏も同行、それに中澤、白井両氏も案内役を買つて下さる有様。私は大船に乗つたやうな心持ちで南京に入り込んだ。支那に何等の経験のない私がかくも安心して任地に到着出来たことは感謝の外はない。

この秋迄の南京は基督教に対して殆ど門戸を閉ざしてゐたやうな有様で、暗雲が覆ひかぶさつてゐた。それが主の御導により荻窪日本基督教会員である白井少佐が、或使命を帯びて渡来、一意工作をつゞけられたため、暗雲は取払はれて、光明が照つて来た。不安におびえつゝ故国を離れた私は、澄み渡つたやうな南京に自分を見出した。中支の此頃は実に澄んでゐる。十一月十六日には昨冬より伝道を開始された東亜伝道会の的場牧師、同じく東亜伝道会の生越牧師、四月に始められた第二日本人基督教会の永倉牧師、それに新来の安村、末包、黒田、斎藤の七名が白井少佐に案内されて、板垣総参謀長閣下、中支憲兵司令官十川閣下其他各方面に挨拶をした。其夜は東亜倶楽部で軍報道部長馬淵大佐の招待を受けた。かくの如く最も心配してゐた方面の困難は、全く神によつて解消されてゐたのを知つて、たゞ神の恵を

³⁵ 「熱誠の嵐の中に東亜伝道部生る 黒田氏送別会」(『火の柱』第122号、1939年11月10日)3頁。

³⁶ 「個人消息」(『福音新報』39年11月23日)10面。

³⁷ 黒田「南京だより」12月13日(『火の柱』1940年1月10日)4頁。

³⁸ 無題「黒田からイエスの友興亜伝道後援会宛書簡」(『火の柱』1940年3月10日)4面。

讚美する以外はなかつた³⁹。

ここで注目すべきは、伝道と称される黒田の事業だ。単なる宗教的な働きだと考えてはならない。寧ろ即ち、国策機関たる中支宗教大同聯盟の動きに連動していたのである⁴⁰。キリスト教は、「日本の青年牧師を進出せしめ、主として第三国人工作に当り、傍ら教育及社会事業の対支工作をなさしむ」役割が期待された⁴¹。上海や南京の占領地における各種活動の記録にも当該方針の貫徹が反映するも⁴²、その諸活動はあたかも「宣撫工作」競争を繰り広げた感すらある⁴³。「白井少佐が、或使命を帯びて渡来、一意工作をつづけられた」という報告は、まさにかかる背景を指す。

しかしながら、国家側がキリスト教に期待した役割は教界側の思惑とは異なっていた。中支宗教大同聯盟は、来るべき「大東亜戦争」／キリスト教大国たる英米との全面衝突に備うべく対欧米工作や中国人伝道には力を注いだものの、对在留邦人伝道には消極的な姿勢を示した⁴⁴。表3に整理した記事に頻出する黒田四郎による「苦悩」の大きな原因も、赴任当初の「大船に乗ったやうな心持ち」が、実は順風満帆に展開しなかった事に

³⁹ 黒田「南京伝道報知」（『福音新報』1940年1月11日）8面。

⁴⁰ 例えば青年会の場合、移民促進に始まるも（「世の冷飯達！満蒙に雄飛せよ」、『中外日報』1938年4月3日、3面）、当該地におけるキリスト教の影響力を鑑みた現地進出が要望されると（「中南支に要望 基督教伝道者－宣撫を第一、伝道第二」、『中外日報』1938年12月11日、2面）、積極的に自らを売り込むようになった（「“対支宣撫工作に基教を採用せよ” 京都YMCAの末包総主事 特務機関長に建策」、『中外日報』1938年11月10日、2面；「東亜青年協力運動に一兵卒として参加 末包京都基青主事」、『中外日報』1939年10月10日、4面）。

⁴¹ 福田闡正「大同聯盟初期の方針に就て」（『昭和十五年七月現在 中支宗教大同聯盟年鑑』1940年11月）111頁。

⁴² 中支宗教大同聯盟は、武漢陥落後の1938年11月末に、軍特務部が宗教部門を司る文部省に移牒して成立、国策にそった宗教政策を担った（「新支那建設に我れ等も参画！」、『中外日報』1938年11月22日、3面；「中支に於ける宗教政策方針」、『中外日報』1938年12月4日、2面；「東亜協同対建設の国策に添ひ中支の宗教工作に邁進せよ」、『中外日報』1938年12月10日、2面）。また、松谷曄介「日中戦争期における中国占領地に対する日本の宗教政策－中支宗教大同聯盟をめぐる諸問題」（『社会システム研究』第26号、2013年）を参照。

⁴³ 崇貞学園や天橋愛隣館のほか、戦時期は被災者保護・救済・医療提供・語学学校設置など、神仏基各教団教派がこぞって着手した。尤も、これが単なる政治追従であってはならぬという自戒は、当初から表明されていたが（ハラ生〔原戌吉〕「時事だより 日本基督教会の支那進出」、『福音新報』1938年10月13日、6面）。

⁴⁴ 註42の松谷前掲論文、69－70頁、及び78－79頁を参照。

起因すると推測されるのである。

黒田は、たとえ「苦難と逆風」のみが与えられ、報いられるところが「寂寞の死」であったとしても躊躇せずに前進する「開拓的精神」の必要性を、「教養のある信仰者、財力のある経験者、若き理想に燃ゆる青年」に向かって説く。そのためにも「彼は信仰に立つてゐなければならぬ。彼は愛に溢れてゐなければならぬ。彼は東亜新秩序の建設に対する理論を解してゐなければならぬ。彼は謙遜であつて、奉仕の人でなければならぬ。又彼はあく迄困苦を耐え、一粒の麦となつても喜んで大陸の土と化し得る人でなければならぬ」と戒めるが、これらは他ならぬ自身に向けた決意表明と解釈できるだろう⁴⁵。

「教会の認可が下りさうで下りません」との苦境は⁴⁶、1940 年末に「中学時代の私の親友が骨を折つてくれ、二週間ほどで許可が与へられた」結果、どうにか脱する事ができた。彼は当時の南京キリスト教界について、「日本人の四団体が、中国人とアメリカ人の基督教協進会に加入して、全く一つとなつて働くことゝなつた。日支親善といふ点から言ふならば、南京は理想的に事が運んでゐる」と報告したのも、認可の目処が立ったからだろうか⁴⁷。

1941 年 7 月には会堂施工式が実施された。黒田は牧会活動のみならず、青年会との協働や訪問者の案内に加えて、「日華合作」組織でも現地指導の役割を担う。42 年 3 月には南京日華基督教聯盟理事長や日本基督教団華中布教区副議長、8 月には華中日華基督教聯盟副会長などに就く。更に 43 年秋には排英米・日華協力を目的とした中国人主体を謳う華中基督教団が結成され、黒田は顧問として指導にあたつた、といわれる。44 年 5 月時点においても教団華中副布教区長兼南京支教区長と見え、現地における両国間の窓口的任務を負っていたのである⁴⁸。また、表 3 にある戦時期の言説には時局受容や戦意昂揚を勧めた文言が多く、大勢に抗う気配は感じられない。

要之、戦時下の諸記録において「ラジオ放送」云々について全く登場しない⁴⁹。「敵将」の細君が賀川に感服した逸話であれば、むしろ「語る」選択こそ自然であろう。い

⁴⁵ 黒田「開拓的精神に立て」（『開拓者』第 35 巻第 3 号、40 年 3 月）20-21 頁。

⁴⁶ 黒田「南京だより」（『福音新報』40 年 11 月 7 日）10 面。

⁴⁷ 黒田「南京だより」（『福音新報』41 年 1 月 23 日）9 面。

⁴⁸ 「南京教会詳報」（『福音新報』41 年 7 月 14 日）5 面、「教団便り」（『教団時報』第 217 号、42 年 5 月 17 日）5 面、「華中日華基督教聯盟結成」（『福音新報』42 年 10 月 22 日）6 面、「華中合同新教団」（『中外日報』43 年 8 月 17 日）2 面、「教区役員及本部職員任命」（『教団時報』第 240 号／第 1 号、44 年 5 月 15 日）6 面など。

⁴⁹ 宋美齡の信仰告白自体は、開戦前に日本で紹介されていた。丸山傳太郎「支那要人の信仰(三) 宋美齡等」（『讀賣新聞』37 年 1 月 8 日、朝刊、5 面）、及び「蔣介石夫人の信仰体験談」（『救世軍士官雑誌』第 27 巻第 4 号、37 年 4 月、22-26 頁）である。

ずれにせよ黒田がこれを「証言」し始めたのは、1970 年代後半に至ってからなのである。

第五章 宋美齡の「ラジオ放送」とはなんだったのか？

台湾における史料公開、及び学術界における言論の自由が定着した恩恵を被り、蒋介石・宋美齡の動向も、現在では丹念な追跡が可能となっている。

蒋介石については、秦孝儀編『總統蔣公大事長編初稿』全 13 冊（中正文教基金会、1978 年－2008 年）、王正華等編『蔣中正總統檔案 事略稿本』全 82 冊（国史館、2003 年－2013 年）、黄自進編『蔣中正先生對日言論選集』（中正文教基金会、2004 年）、黄自進・潘光哲編『蔣中正總統五記』全 5 冊（国史館、2014 年）、呂芳上編『蔣中正先生年譜長編』全 12 冊（国史館、2014 年）、そして『蔣中正日記』（民国歴史文化学社、2023 年～）等の一次史料・二次史料が、随時閲覧できる。

宋美齡の場合も、数多くの英語著作のほか、国民出版社編『蔣夫人言論集』（重慶：国民出版社、1939 年）、青年文協社編『蔣夫人訪美言論集』（福建：中国文化服務、1944 年）など、日本占領地を避けて発行された著作集、あるいは近年の中台協力による成果たる張憲文・武青主編『宋美齡文集』全 5 冊（台北：蒼壁出版、2015 年）がある。戦時・戦後を含めて、黒田「証言」を検証する条件は既に整えられているのだ。

これら史料群には宋美齡のラジオ放送原稿も幾つか残るが、基調は厳しい日本批判と徹底抗戦の呼び掛けであった⁵⁰。また、蒋介石に頼まれて協同組合運動を指導した旨を戦時中に豪語した賀川であったが⁵¹、厩大な蒋介石諸文書群において、徳富蘇峰や松岡洋右・土肥原賢二など随所に登場する日本人の中に、遂にその名は発見されない。

更に「疎開」先の臨時首都・重慶におけるラジオ局は 1938 年 1 月に開局したが、外国語放送が開始されたのは 39 年初めだ。無論それらの番組は、国民党宣伝処によって厳しく報道統制されていたのである⁵²。

これらを前提に、そろそろ種明かしを開始しよう。まず、黒田牧師が「回想」した内

⁵⁰ 日時が近いものとしては、宋美齡「向美国婦女广播講演演（1939 年 10 月 26 日）」（張憲文等編『宋美齡文集』第 2 卷、蒼壁出版社、2015 年、879－884 頁）がある。また石川照子「米中関係と宋美齡」（『大妻比較文化』第 2 卷、2001 年）、及び呂芳上「广播演説的魅力－從抗战時期蔣夫人在美的演説講起」（『近代中国』第 151 期、2002 年）も参照。

⁵¹ 賀川豊彦・清水安三「対談 和やかに支那を語る」（『週刊朝日』第 987 号、1939 年 4 月 16 日）。

⁵² 川島真「日中戦争初期における重慶発ラジオ放送とその内容」、及び佐藤淳・貴志俊彦「東アジア・ラジオ放送関連年表」（貴志俊彦・川島真・孫安石編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、2015 年）を参照。

容は決して出鱈目な作り話ではない。だがこれは、ニューヨークで発行されていた *Forum and Century* という雑誌に掲載された、“What religion means to me” という一文なのだ。その発表は 1934 年 3 月、なお日中間で停戦や和平の可能性が模索された時期であり、国民政府は直面した内憂外患に対して、「先安内後攘外」一先に内敵である中共勢力を平定、後に外敵に対応する一政策を実施した段階の史料である。

34 年初めの段階において、江西省井岡山を拠点に抵抗を重ねる中国共産党（中華ソビエト共和国）を潰滅させるべく国民政府側は第五次围剿作戦を発動、150 万人の軍隊（中央軍・広東軍・湖南軍）を動員して内戦を繰り広げていた。蒋介石と宋美齡も、まさにその時、最前線に身を置き剿共戦に従事していたのであった。

And today I can pray for the Japanese people, knowing that there must be many, who, like Kagawa, suffer because of what their country is doing to China.

黒田証言を通じて賀川研究者の間では良く知られた一節も、この信仰告白に含まれている。だが証詞は英語圏人士に向けたメッセージであり、更にいえば、Eleanor Roosevelt (1932 年 12 月号) や Mary Pickford (1933 年 8 月号) など、世界的なファースト・レディや著名女性による連載に、宋美齡も招かれた結果の産物だと思われる。日中戦争激化後も、May-Ling Soong Chiang, *This is Our China*, Harper & Brother Publishers, 1940. などは、これを戦前と同文のまま再録している。

※ ※

ところが一転して、中国語版の状況は複雑だ。訳文には幾つかの種類がある。管見の限り最初の公刊訳は、(a) 星野訳「宋美齡女士之宗教意義談」（『中央時事週報』第 3 巻第 13 期、1934 年 4 月 7 日）であった。南京・中央日報社という御用新聞系の紹介であり、抄訳で賀川にふれた部分は省略されている。

他方、キリスト教系雑誌においては、(b) 蔣宋美齡著・慕絜訳「宗教對於我的意義」（『同工』131 期、1934 年 4 月 15 日）以降、(c) 「我的宗教經驗」（『華興週刊』第 31 巻第 25 期、1934 年 7 月 4 日）、(d) 宋美齡女士原著・記者訳述「我的宗教經驗譚」（『明燈』第 207 期、1934 年 7 月？日）、(e) 蔣宋美齡著・慕絜訳「宗教對於我的意義」（『佈道雜誌』第 7 巻第 4 期、1934 年 7 月？日。これは(b)の転載）、(f) 宋美齡女士原著・明燈記者訳述『我的宗教經驗譚』（広学会、1934 年 7 月？日。これは(d)を単行本として出版）、(g) 宋美齡「我的宗教」（『真光』第 33 巻第 8 号、1934 年 8 月？日）、日中戦争勃発直前においても、(h) 宋美齡女士原著・明燈記者訳述「我的宗教經驗譚」（『聖公会報』第 30 巻第 1 期、1937 年 1 月 1 日。これは(d)を転載）などには、英文版と同じく賀川豊彦の名が登場する。まさに、1920 年代から中国キリスト教界で高まった名声の賜物だろう。

では、官側メディアはどうだったか？ 唯一の例外として、(i) 指導長原著・明燈記者訳述「我的宗教經驗談」（『婦女新生活月刊』第 5 期、1937 年 5 月？日）も(d)を転載

するが、これは新生活運動関連の刊行物である。前出(a)『中央時事週報』、そして戦時下出版され、後の宋美齡著作の底本となった(j)「我的宗教觀」(『蔣夫人言論集』国民出版社、1939年2月?日)といった官製訳において、賀川云々の部分は等しく削られていた。

またテキスト全体の文脈において、賀川礼賛や日本擁護は主題ではない。満洲事変後に日本の潰滅を願う宋美齡を母親が諫めた出来事を披露しながら、母の信仰的良心を継承した自己をアピールする内容だ。「愛敵」精神こそ含まれているが、無力を承知で敵軍と戦うわたくしたちの上に、神の御加護がある旨の確信を述べた信仰告白文と解釈するのが妥当だろう。三四年後半に中共軍は大敗走に追い込まれるが、要するに当時の最大の敵、すなわち共産党—日本ではない!—と対峙していた時期の祈りなのであった。

如上の検証と推理とを重ねると、読者諸賢は次の理路を発見するだろう。すなわち、満洲事変から中国東北部の植民地化過程においては、いまだ停戦協定など状況の流動性とも相俟って、日本の「良心」を表象する「平和主義者」賀川に対する肯定的な評価はなお継続した。しかし実質的全面戦争が勃発した1937年7月以降、「良心」への信頼にも揺らぎが発生、遂に官製訳から抹消されるようになった⁵³、と。

※ ※

この仮説を検証すべく、側近が記録し続けた大部の起居注たる『蔣中正總統檔案 事略稿本』を繙いたが、不可解な事態に直面した。すなわち1934年4月15日の条において、既に全訳が丁寧な毛筆楷書で筆写されていたのであった。書記者の苦勞が偲ばれるも、そこには「是夕夫人以新作『我的宗教觀』一文就正于公。公甚称之。後此文刊载于『美国論壇』雜誌」とあり、蔣介石への意見を求めた後の作品だと明記されるのである⁵⁴。

そして未公刊『事略稿本』版は、なんと1939年2月の官製全集たる(j)『蔣夫人言論集』版と、訳文は完全に同一であった。公刊に先立つ五年前に官製訳が完成しており、そこで早くも賀川の名は「消されて」いた。如何なる判断が働いたのか、史料は何も語らない。もしかしたら、Toyohiko Kagawa という固有名詞が漢字変換できなかったのかも知れないが、英文から直訳された(f) 広学会版を以て前後の文脈を再確認しておきたい⁵⁵。

後來有一天、我和她講起東三省事件時、憤怒地說道：『母親、你的禱告是很有力量的。何不禱告上帝、使日本發生地震、毀滅無遺?』母親聽了我的話以後、沉吟了一回、然後用着嚴肅的口吻對我說道：『我們做禱告的時候萬萬不可請求上帝做殘暴的

⁵³ 中国における賀川評価の変遷については、拙稿「中国における賀川豊彦評価をめぐる」(『立命館経済学』第65巻第6号、2017年)を参照されたい。

⁵⁴ 周美華編註『蔣中正總統檔案事略稿本』第25冊(国史館、2006年)471頁。

⁵⁵ 宋美齡女士原著・明燈記者訳述『我的宗教經驗譚』(広学会、1934年7月)5頁。

事情、上帝也決不会允許我們這種請求、而且我們心中實在也不願做這種事情。』這一番話在我的心中留下深刻的印象。現在我時常為日本人民禱告、因為他們中間也有許多好人、譬如賀川豐彦之流、他們反對他們政府的侵略行為、而對於中國人民是深表示同情的。

〔(事変) 後のある日、私は彼女と満洲事変について語った折、憤ってこう言った。『お母さん、あなたの祈りには大きな力があるのに、どうして神様に日本で地震が発生して、徹底的に壊し滅ぼして下さいと祈らないのですか?』。母は私の話を聴いた後で暫く考え込み、厳粛な口調で私に語った。『祈りの際は絶対に神に残虐な事柄を願ってはなりません。神は決してこのような願いを許さず、私たちの心もそれをなすことは願わないでしょう』。この話は私の心に深い印象を刻み込みました。現在の私はいつも日本人民のために祈っています。何故ならば彼等の中にも多くの善良な人々、例えば賀川豊彦のような人が存在しているからです。彼等は政府の侵略行為に反対しながら、中国人民に対して深く同情の念を表明しているのです。〕

1939 年末に黒田が南京で接したという「逸話」をとりまく真相は、かくなるものであった⁵⁶。

第六章 小括

上述の分析を帰納すると、黒田四郎牧師がいう 1939 年 12 月の宋美齡による「ラジオ放送」は、存在しなかった。無論、広範に流布したテキストを、誰かが何らかの目的で「代読」乃至「紹介」した可能性は残る。しかしながら、中華民国のファースト・レディたる宋美齡みずからこれを語る状況は、歴史的に想定できない。したがって、逸話を「真実」と受け止めて歴史解釈に介入させること自体、非常に危険である。尤も、東亜同文書院出身の支那通ジャーナリスト・村田孜郎の場合も 1939 年 7 月に公刊した書籍において、類似した信仰告白を 1936 年末の「西安事変後、宋美齡が自らの心境を語り、かつ日本の姉妹たちに訴へたるもの」と紹介しており、当時から

⁵⁶ 当該史料の和訳に、「私に対する宗教の意味」(蔣宋美齡著・長沼弘毅訳『わが愛する中華民国』時事通信社、1970 年)がある。同書は、Madame Chiang's messages in war and peace, Hankow: China Information Committee, 1938.からの訳出であり、賀川の名は登場する。しかしながら、これを以て戦時下 38 年時点の論拠と見做すことが不可能な点は、既に詳述した通りである。なお、本来であれば『蔣中正日記』による検証も行いたいところであるが、本稿執筆時にまでに戦時期部分が入手できなかったため、後日の課題とする。

様々な情報が錯綜していたのではあろうが⁵⁷。

むしろ思索すべき課題は、1970年代後半において、何故に黒田たちが「賀川の偉業」とあわせて「蒋介石への恩義」あるいは「宋美齡の篤い信仰」を語ったのか、その点に所在するのではない。再び表3に戻れば、1970年代以前に黒田が記した文章では、この逸話は全く登場しない。大陸時代については、みずからは時流から距離を置いた旨の主張が印象に残る程度だ⁵⁸。南京での活動を回顧した著書においても、宋美齡がこの内容を「言ったと伝えられている」と記すのみである⁵⁹。だが突然、黒田はこれを実体験として語り始めた。恐らく、何らかの意図がこの「回想」に籠められていたのではなかろうか。

「はじめに」で見た通り、戦時期中国からも高く評価された賀川豊彦というイメージ形成に、黒田の「研究」は大いに貢献しており、その意味で彼は側近として十分すぎる役割を果たした。但し我等が平素用いる「研究」概念と、黒田がいうそれとの間には、大きな落差が存在している。日曜学校教育を念頭に置いて書かれた小論ではあるが、以下は極めて雄弁だ。

偉人「研究」とは、第一義的に若い生徒たちが「深い靈性の底から興味を引出し、かつ「勇躍を感じ」て「栄光に心をふるはす」ためにある。そして「永遠の希望は、キリストの十字架を通して与へられるのであるが、彼等は具体的に史上の人物によつて与へられる」。その際、「殊に偉人が神の御声をきゝ、みことばを示されて立つた事実を知らしめ、生徒に聖き召命をはつきり意識せしめ、彼らの生涯を左右する偉大なる決心を起こさしめねばならない」⁶⁰、と。

ふたつの「研究」の優劣を論じるつもりは毛頭ないし、また論じても意味はなかろう。ただ、斯様な事実群が厳然と存在した経緯のみを明かして、第Ⅱ部での作業を終えたいと思う。続く第Ⅲ部では、この「美談」が実は1970年代後半につくられた経緯について、解き明かして行きたいと思う。

⁵⁷ 宋美齡「私は祈る」(村田孜郎『宋美齡』ヘラルド雑誌社、1939年7月)130頁、及び142-144頁。

⁵⁸ 黒田『人間賀川豊彦』(キリスト新聞社、1970年)221-223頁。

⁵⁹ 黒田『主は生きておられるー大戦下南京伝道の奇跡』(黒田会、1989年)13頁。この文献は、同志社大学の森田喜基先生が提供して下さった。記して感謝を申し上げる。

⁶⁰ 黒田「信仰偉人研究の方法」(『日曜学校』第二七卷第八号、四〇年八月)五一-六頁。

第Ⅲ部 賀川豊彦「秘話」誕生の戦後史的背景

第七章 国民政府による賀川豊彦評価について

第Ⅱ部に関連して補遺すべきは、中国国民政府側による賀川豊彦評価の問題である。国史館所蔵の外交史料によれば、1940年3月時点において既に、対華僑破壊工作首謀者の一人として賀川の名前が挙げられ、各方面に警戒が呼び掛けられていた⁶¹。これは例えば「大東亜戦争」勃発にともない日本が占領した上海租界内のミッション系大学・聖約翰（セント・ジョーンズ）大学に赴任、教職員や学生を守った田川大吉郎に対する好意的評価とは、随分と異なる⁶²。

同様に、対日寛大政策誕生の原因云々という珍説について、戦後の蒋介石政権側に属した人物により反駁してもらおう。なお「以德報恩」については、1947年11月に賀川主幹の雑誌『世界国家』において、巻頭論文たる賀川「敵を愛する精神」に続き概要が紹介され、関心の高さが窺える⁶³。

まず、『自由中国』東京特派員・余蒼白のコメントから。同誌は、昔日の賀川と親交があった文化人兼政治的要人の胡適と京都帝大出身の雷震が、中共政権成立直後に台北で刊行した雑誌であり、今日では台湾民主化の思想的源流に位置づけられている。「聖誕節在東京」と題する1951年末の報告では新日本建設キリスト運動が紹介されるも、こう記される⁶⁴。

この宣教運動で特に注意すべきは、（四六年）当時GHQが組閣の中心に担ぎ上げようとした賀川豊彦を中心に展開していることだ。賀川は戦時期にはルーズベルトを揶揄してアメリカを罵倒した、あらゆる悪事をやってのける上帝の信徒である！

ついで、台湾社会学の父と呼ばれた大陸系の学者・龍冠海の回顧をみよう。①米国留学中、反戦詩（「何故か」や「悩みの子」であろう）を読み賀川に関心を抱いたが、

⁶¹ 〈汪政権海外活動破壊抗戦〉、四〇年－四二年、《外交部》、国史館蔵、数位典藏号：020-010114-0007。

⁶² Baker, Richard, *Darkness of the Sun: The Story of Christianity in the Japanese Empire*, New York: Abington-Cokesbury Press, 1947.

⁶³ 蒋介石「暴を以て暴にむくゆるなかれ」（『世界国家』第1巻第5号、1947年11月）7頁。

⁶⁴ 余蒼白「聖誕節在東京」（『自由中国』第6巻第2期、1952年1月）28頁。

②その言説を追うと複雑な気分となり遂に直接手紙を出した経緯、③及び私信文面を詳細に紹介するが、総括的評価は次の通りである⁶⁵。

賀川が日本の中国侵略戦争中になした言行を観察していると、むしろ私は失望させられた。……だから私は賀川と彼の国家に対する反感、及び賀川自身に対する期待を手紙に託したのである。……（この手紙が英文秘書から手渡されたのか否か等々、もはや確認する術もないが）彼個人の名声も日本の国運没落とともに地に落ち、少なくともアメリカ人は賀川を日本のガンディーだと持ち上げることはなくなった。

ちなみに戦後台湾教界は、現在では独立運動の信仰的な砦となっている台湾基督長老教会を含めて、二・二八事件等の苦難を経た後も政権とは近い関係を保った⁶⁶。「台湾独立の父」たる李登輝の場合でも、1980年代の奨励においては、基本的に蒋介石の信仰に対する高評価を公言していたのである⁶⁷。要するに、中共との内戦時期や台湾移転後を含めて、国府の対外政策上の判断一個人の心の内側における次元ではない――賀川の個人的行動が影響した可能性は、限りなくゼロに近いと断言せざるを得ないのだ⁶⁸。

だがそもそも「著名人」に託して信仰を語る発想そのものに、陥穽があったのではないか。蔣家による白色テロの残虐性も、すべてが神に由来する行為だったのか？

その行動が超人的であり、また多くの人々の生活に対して計り知れない影響を及ぼし続けてきたが故に、賀川豊彦には「伝説」が数多く生まれた。しかしながら彼は、たとえ虚像を脱して等身大の姿に戻ったとしても、なお我等に豊かな示唆を与えてくれる人物である。特に現在、アジアとわたくしたちとの関わり方が双方向的に揺らぎ行く過程で、いたずらに中国や韓国との対立を煽る牧会者まで出現し始めた。それゆえになおさら我々は、信仰の先達による働き――成功も失敗も含めて――を謙虚に振り返

⁶⁵ 龍冠海「留美回憶的一章（続完）」（『伝記文学』第2巻第3号、1963年3月）13－14頁。

⁶⁶ 鄭睦群『從大中華到台湾国－台湾基督長老教會的国家認同及其論述轉換』（国史館・政大学出版社、2017年）の議論を参照。

⁶⁷ 李登輝『愛と信仰』（早稲田出版、1989年）に訳出された数多くの奨励には、蔣家への顕彰こそあれ批判はまったく見られない。

⁶⁸ 他方で台湾人の場合、戦後の長老教会で長らく牧会した鄭連徳牧師は、青年時代に改姓名の許可を得て「賀川英彦」を名乗った。無論、賀川豊彦を尊敬するが故の名付けであり、その日記には若き日々の心の旅程が窺い知られる（鄭連徳著・黄彦傑編訳『最後の雄鷹――一位台籍日軍飛行員の戦時日記』秀威資訊、2021年）。

り、信と知とを接近させるべく学び／祈り続ける必要があるのだ。

第八章 「秘話」誕生の時代

本稿第Ⅱ部における考察を、改めて整理しよう。黒田による「南京回想」をめぐる言説を時系列に沿って検討した結果、筆者は以下のような結論を得た。

- ① 1939 年末、南京赴任直後の黒田が耳にしたという宋美齡による「賀川顕彰」テキストそのものは実在しているが、それは未だ日中戦争が勃発する以前の 1934 年、すなわち「和平」も模索される段階の史料であった。
- ② 「賀川礼讃」なるものは、満洲事変後に日本の滅亡を祈ろうとした宋美齡をたしなめる彼女の母親の信仰的発言として記録されたものであった。
- ③ 戦時期における黒田自身による記録には、「秘話」をめぐる話題は全く登場しない。
- ④ したがって、1939 年云々という黒田の「回想」は、記憶の混同による誤認、乃至は創作の可能性が高い、と。

そして仮説的に、宋美齡による賀川顕彰のラジオ放送といった「秘話」は、戦時中ではなくてむしろ戦後、特に 1970 年代前後の戦後史的な文脈の中で生まれたのではないかと推測した。黒田四郎牧師の「南京」をめぐる言説一覧を整理した表 3 によっても、「秘話」誕生の時期は 1970 年代半ば以降であると強く示唆されたからである。

賀川と民国要人たちとの関係性を取り巻く歴史分析については、浜田直也らによる研究成果に委ねたい⁶⁹。本章では専ら、賀川没後における「秘話」形成プロセスについて、戦後の日本と台湾／中華民国をとりまくキリスト教史のなかに探りたいと思う。

第 1 節 「秘話」前史

謎解きの大きなヒントは、1977 年 1 月に黒田四郎が『湖畔の声』に寄稿した著作（表 1 の 17、表 3 の 1）に附された「日本キリスト伝道会エバンゼリスト」という肩書にあった。筆者は、これを頼りに様々な方面を試行錯誤しながら探り、結果として本稿が提示する如き結論を得たのであるが、本章では特に「秘話」誕生の現代史的背景について、前史に遡って検討して行きたい。

⁶⁹ 浜田直也『賀川豊彦と孫文』（神戸新聞総合出版センター、2012 年）に集大成された研究を参照。また、拙稿「賀川豊彦の中国－語られ方／語り方」（『キリスト教文化』通巻 7 号、2016 年）や、拙稿「中国における賀川豊彦評価をめぐって－1920 年から 1949 年の事例研究」（『立命館経済学』第 65 巻第 6 号、2017 年）、拙稿「賀川豊彦の第一回中国訪問について－1920 年夏の〈原体験〉を思考する」（『賀川豊彦学会論叢』第 29 号、2022 年）、拙稿「賀川豊彦の民国形象攷」（『立命館経営学』第 63 巻第 6 号、2025 年）なども、併せて参照されたい。

ここで、舞台となる 1970 年代を理解するための前史を簡単に眺めてみたい。ひとこととまとめるならば、強かった中国が弱体化し、新参の日本が次第に強国化していったのが、欧米列強との関係性を前提として成立した近代東アジア史の基本的動態であった。

すなわち中国は、1842 年のアヘン戦争敗北以来、欧米列強との戦争に連戦連敗を重ねて朝貢国を次々に喪失、不平等条約のため経済的にも従属的地位に甘んぜざるを得ない状況に苦しんだ。19 世紀後半には遂に日本との戦争にも敗れて台湾を失い、また朝鮮半島における影響力も減退して、往時の世界帝国としての面目すら保持できない有様であった。1912 年には、こうした体たらくを重ねた清朝を打倒した孫文ら革命派によりアジア初の共和国たる中華民国が成立するも、列強の思惑と結託した軍閥間の内戦で混乱を深め、二十一ヶ条要求や山東問題など日本による圧迫も本格化した。

1920 年代後半、英米の支持を受けながら満洲を含む中国を「統一」したかに見えた蒋介石率いる国民党勢力であったが、共産党との内戦や済南事件や満洲事変に見られる日本による侵略に直面、「内憂外患」に苛まれる。1937 年以降は、所謂「支那事変」から「大東亜戦争」に拡大した対日全面抗戦の遂行に全力を傾注せざるを得なかった。さらに「惨勝」とも呼ばれた 1945 年の戦勝後は、戦後経営をめぐる共産党との主導権争いに直面、時局はまもなく内戦状況を迎えるに至る。

ついで、台湾を見よう。日清戦争後の台湾は、50 年間にわたり日本の「外地」として統治された。激しい抵抗運動も昭和初年以降には収束して、さまざまな限界は残しながらも相対的に安定した状況を迎える。キリスト教の場合、日本支配が開始する前から存在していた欧米ミッションによる伝道活動に加え、日本基督教会を中心とした宣教が試みられ、他の会派や無教会などを含めた「内地」との各種交流も盛んに行われていた。台湾人は福建語や北京語を解したので、戦時中に大陸伝道の最前線に赴いた牧会者や神学生も多く出現したのであった。

1945 年の日本敗戦によって、こうした関係も強制的に断絶された。日本に代わって新たな統治者となった中華民国の執政党たる国民党は、「惨勝」直後から本拠地の中国大陆において共産党との内戦に明け暮れて疲弊していた。台湾統治の初期から「二・二八事件」(1947 年)と呼ばれる反政府蜂起を発生せしめるに至った収奪的な支配をおこない、キリスト教界指導者にも犠牲者が出た。

そして 1949 年の大陸放棄に前後して蒋介石率いる国民政府が数百万の軍人とともに移転してきたが、翌年に勃発した朝鮮戦争によって台湾は極東の防共最前線の一環に位置していたがゆえ、米国による支援を受け続けることが可能になった。蒋介石・宋美齡夫妻はじめ、相当数の要人がクリスチャンだったこともあり、キリスト教に対しては一反共的な意味合いも込めて一友好的かつ籠絡的な態度が取られたのである。

では、かかる激動に見舞われた台湾の隣人たちと、日本のキリスト者はどのような交

わりを持って来たのだろうか？ 戦前・戦時期の動向はひとまず別稿⁷⁰に譲り、ここでは三つのアプローチを通じて主に戦後の動向を概観したい。

第2節 教界雑誌を通じた観察

まず、戦後日本で刊行された主要な教界雑誌を通じて観察してみたい。教界内の輿論形成やブームが、これらの中に色濃く反映されると考えるからである。

(a) 『ニューエイジ』→『月刊キリスト』の系列（教文館）

同誌では、1949年から中華人民共和国に関する記事が確認できる。主な書き手は、清水安三・村山知行・中野政成・秋山良太郎・高良富子・坂西志保・内山完造・久野収・阿部知二・山主敏子・石井漠・中濃教篤・佐木秋夫・中島健蔵・高木幹太・松尾喜代司・小柳伸顕・田辺南鶴・穴戸寛・鈴木正久などであった。

これに対して台湾／中華民国を扱った記事は、時事問題の短評（「風雲はらむ台湾—SEATO 結成をめぐって」、『月刊キリスト』第6巻第10号、1954年10月）や井上伊之助の自伝（「わが信仰の生涯 生蕃伝道がみのるまで」、『月刊キリスト』第13巻第9号、1961年9月）、海老沢宣道（「東南アジア紀行—平和な台湾をたずねて」、『月刊キリスト』第8巻第8号、1956年8月）や工藤英一（「台湾山地のキリスト教」、『月刊キリスト』第13巻第3号、1961年3月）の紀行、許千恵による日本キリスト者批判（「イバラの道を歩む教会—台湾のキリスト者から日本のキリスト者へ」、『月刊キリスト』第23巻第2号、1971年2月）など、極めて少ない。

(b) 『基督教文化』→『福音と時代』→『福音と世界』の系列（新教出版社）

同誌において、「中国」を語る記事は戦後の比較的早い時期から確認できる。そしてこの場合の「中国」とは、中華人民共和国を意味する場合が大半であった。主な書き手は、溝口靖夫・幼方直吉・小塩力・穴戸寛・石原謙・渡辺道子・石原憲治・長（武田）清子・浅野順一・丁光訓・小沢三郎・高木幹太・高戸要・森岡巖・蓮見博昭・小川圭治・飯坂良明・末包敏夫・向井芳男・大森三郎・穴戸峰子など、多士済々である。

これに対して「台湾」の登場は、なんと1970年代半ばであった（LMN「麗しの国〈台湾〉の苦悩」、『福音と世界』第29巻第2号、1974年2月）。要するに、殆ど見向きされなかったのである。

(c) 『百万人の福音』の系列（いのちのことば社）

同誌はそもそも、海外に関する記事は相対的に少ない。ただし1950年代から台湾で

⁷⁰ 拙稿「『中日戦争時期有関中国的論述—神職人員眼中的他者鏡像』」（司佳・徐亦猛編『近代東亜国際視閥下的基督教教育与文化認同』復旦大学出版社、2019年）、及び拙稿「危機下の日中基督教関係史—“中国認識”的諸面相」（『抗日戦争研究』2021年第4期、中国社会科学院近代史研究所、2021年）で、戦前・戦時期における日本人クリスチャンが如何に中国と向き合ったのかという問題を総論的に論じた。併せて参照されたい。

の宣教で相当な成果を収めつつあったウオッチマン・ニーやアンドリュー・ジーらの作品が登場し、文革発動前の段階における「中共の教会はどう変化したか」(『百万人の福音』第118号、1961年6月)という批判的筆致で仕上がったルポも個性的であった。歴史問題に関しては、例えば山田晴枝「神は満州で私をとらえられた」(『百万人の福音』第124号、1961年12月)、あるいは「秘境熱河の土に生く一満洲伝道に生命をかけた一日本人宣教師の生涯の記録」(『百万人の福音』第156号、1964年8月)に見られるような信仰奨励の文脈で纏められていた。台湾に関しても、「台湾山地伝道に生きる 松元茂宣教師」(『百万人の福音』第205号、1968年9月)の如き献身の紹介を見出すことができる。

第3節 各種著作物を通じた観察

次に、主要三誌以外の教界著作物にまで考察範囲を拡大した結果を、簡単に紹介しよう。

前項と同様の傾向は、教界著作物全般においても発見される。台湾基督長老教会から招かれて訪台したNCC教会学校部幹事の藤田正武「新しい台湾を見て」(『開拓者』第50巻第5号、1955年5月)は戦後初の視察交流記であるが、これに続くものは生れなかった。

1950年代後半には、課題としての海外宣教が再び議論され(JCC伝道部編『伝道の理論と実際』いのちのことば社、1959年)、60年代には日本海外宣教会の派遣宣教師が台湾に赴任した記録が確認できるも、その詳細について記された文献は未見である。

他方でとくに社会情勢に対する関心が高い方々は、中国に対する好意的な筆致が目立つ。例えば長清子は現地で中国キリスト者と交流した経験を報告するレポートで、「中国の Kommunismus は他国のそれと異り、非常に中国化され、ヒューマニスティックで、寛容であるから、まさつが起らず、いろいろ異った思想的立場の人たちにも、夫々に自由を保障し、彼らを幸福にもし、また、彼らの協力も得られる」のが現状であり、これを恐れたクリスチャンが逃亡した先の一つに台湾を挙げている(「青年と語る新しい中国」第二回、『開拓者』第51巻第9号、1956年9月)。翌年春に超教派代表団として中国に招待された浅野順一による報告も、非常に楽観的な観察に終始していた(『新しい国 新しい教会—新中国に使いして』日本基督教団出版局、1957年12月)。

さらに仏教者として平和運動を積極的に実践しキリスト教平和運動にも影響を与えた日蓮宗僧侶の中濃教篤と壬生照順は、アメリカ帝国主義を平和破壊の主敵だと見做すロジックによって、これと対抗する中国の在り方を非常に高く評価した。別言すれば要するに、台湾とは「解放」されるべき反動的な土地に過ぎなかったのである(「アジアの仏教」、『信仰者の抵抗』、誠信書房、1959年4月、116～118頁)。

この他、1970年以前に確認できる台湾キリスト教をめぐる著作は、筆者による悉皆調査でも高俊明「台湾の近代化とキリスト教」(『国際基督教大学学報Ⅲ—A アジア文

化研究』第4号、1967年）、及び『台湾交換伝道報告』（日本基督教団伝道委員会、1968年12月）が見いだされるに過ぎない。しかも後者には「台湾側が受入れられない表現」があったため、なんと「全冊回収処分」されてしまった。

第4節 日台キリスト教交流史からの観察

最後に、日台キリスト教交流史の展開を意識しながら、1970年代における「秘話」の誕生の歴史的背景を探ってみよう。

表4 日台キリスト教交流史略年表（1963～1985）

	世界・社会	日本基督教団（NCC系）	日本キリスト伝道会（JEA系）	教界・その他
1963	12. ケネディ大統領暗殺。	3. 教団海外伝道委員長岡田五作と長老教会総主事黄武東らの間で人事交流の協約が締結、7月に発効。	2. 日本キリスト伝道会が成立。	
1964	10. 東京五輪開幕。 10. 中国原爆実験成功。	1. 職域伝道視察の牧師が来日。 協約により台南神学院のハンドベル・コワイヤが来日。		
1965	2. 北爆開始。 6. 米国の台湾経済援助（米援）終了。	2. 教団がベトナム問題の平和的解決を願う大統領宛書簡送付を決定。 3. 北森嘉蔵が台湾訪問。		5. ベトナムに平和を求めるキリスト者緊急連絡会議が発足。 12. 第二ヴァティカン公会議閉幕。
1966	8. 文化大革命本格化。	1. 小原安喜子が台湾訪問。 8. アジアキリスト教教育セミナーに参加する6人が台北訪問。	4. 益田泉が台湾伝道。 5. アジア福音信徒大会が韓国で開催。 10. 益田泉が沖縄・台湾伝道。	9. 紀元節復活に反対するキリスト者の決起集会。
1967		3. 教団、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」。	8～10. 益田泉が台湾伝	5. 『台湾教会公報』1005号に、鈴木正久が署名論文掲載。

	11. 初の建国記念の日。	10. 教団伝道委員長菊池吉彌以下、森文次郎・岸本貞治・小川秀一・遠藤栄・戒能団平・千葉昌邦の牧師7人が訪台。	道。 11. アジア・ホーリネス教会連盟創立総会。	10. ビリー・グラハム東京クルセイド。
1968	4. キング牧師暗殺。 6. 学園紛争。 10.、明治百年記念式典。	7. 長老教会より黄加盛牧師以下5名の牧師が日本訪問。 7. 長老教会より宣教師として蔡一信牧師が派遣され東京台湾教会に赴任。 10. 教団、海外伝道委員会廃止。 12. 『台湾交換伝道報告』が出版されるも、全冊回収。	4. 日本福音同盟成立。 8～9. アジア福音宣教会による超教派の台湾伝道に加藤正義牧師が参加。	3. NCC が大阪万博でキリスト教館の設営を決議。 9. アジアの平和・日米キリスト者会議開催。
1969	7. アポロ月面到着。	9. 教団、「万博問題」を機に紛争へ。 11. 教団は第二次台湾交換伝道について「より高度な政治的判断を必要とする」として保留。	6. 原登牧師が沖縄・台湾伝道。	2. 教団と沖縄基督教団の合同。 4. 第一回日本キリスト者平和の会全国大会。 6. 関東学院神学部廃止決定。
1970	3. 万博開幕。 3. よど号事件。		この頃から、福井二郎と黒田四郎が日本キリスト伝道会エバンジェリストとして登場。	3. 東京神学大学に封鎖解除のため機動隊突入。 4. 長老教会が教会内外からの圧力でWCCを脱退。
1971	11. 台湾の国連追放。			5. 黄彰輝元議長ら長老教会幹部が次々に訪日（～12年10月）。 12. 長老教会の「国是声明」。
1972	2. 浅間山荘	5. 台湾北部宣教百周年	定家都志男牧師が台湾伝	

	事件。 2. ニクソン 訪中 5. 沖縄返 還。 9. 日台断 交。	記念会に教団の代表 3 名 が参加。	道。	11. 青山学院大学神学 科募集停止。
1973	1. ベトナム 和平協定。 8. 金大中事 件。 10. 佐藤栄 作ノーベル 平和賞を授 与。	11. 教団総会、4 年ぶり に開催。	10. 日本キリスト伝道 会、台湾国際伝道会日語 礼拝が開始する際に聖書 100 冊を寄贈。 10. 武藤富男と伊藤栄一 が日本キリスト伝道会エ バンジェリストに参加。	2. 台湾国際伝道会が 成立。 10. 台湾国際伝道会日 語礼拝開始、加藤實が 協力牧師になる。
1974	8. ニクソン 辞任。	教団は、淡水工商管理専 科学校に赴任した加藤實 牧師を在外宣教師として 承認。	6. 日本福音同盟主催の日 本伝道会議。	
1975	4. 蔣介石 没。 7. 沖縄海洋 博。 8. 日台航空 路再開。		8. 日本キリスト伝道会が 台湾国際伝道会の頼炳炯 牧師から要請を受け、韓 国国際伝道会を交えた宣 教協力覚書を交わす。 10. 台湾ビリー・グラハ ム伝道大会に三川茂牧師 を派遣。	1. 台湾当局による台 湾語・タイヤル語聖書 没収事件。 3. 部落解放同盟が教 団へ「確認書」（いわ ゆる「賀川問題」の発 端）。 11. 長老教会、「われ われの呼び掛け」を発 表。
1976	7. 田中角栄 逮捕。 9. 毛沢東 没。		1. 伊藤栄一牧師の台湾伝 道。 3. 頼炳炯牧師が日本各地 を巡回伝道。	10. NCC 部落差別委 員会の設置。
1977	6. 米国の 「一つの中 国」政策。		4. 日本キリスト伝道会 が、玉山神学院に電話敷 設料金として現金 60 万円	？. 日韓台教会宣教協 議会がソウルで開催。 8. 長老教会、「人権宣

	7. 指導要領で君が代を国歌と規定。		を寄附。 5. 伊藤栄一牧師が台湾伝道。 8. 頼炳炯牧師が第九回日本伝道の幻を語る会で講演。	言」を発表。 11. 中壢事件。
1978	5. 成田空港開港。 12. 改革・開放政策開始。	12. 教団総幹事中島正昭の台湾訪問。	3. 日韓台教会宣教協議会が東北アジア教会宣教協議会と改称。 4/5 日本キリスト伝道会が蒋介石総統召天三周年記念会に際して会長メッセージを託す。 11～12. 伊藤栄一牧師が台湾伝道。	2. 韓国キリスト教界有志による「三・一民主宣言」。 ?. 東北アジア教会宣教協議会が台中で開催。
1979	1. 米台断交。 12. ソ連のアフガニスタン侵略。	長老教会より宣教師として、蘇慶輝牧師が東京台湾教会に派遣。	1. 諸貫香恵子と古川和美が台湾各地を巡回伝道。 9. 新竹聖經学院に 60 万円を寄附。	3. 国際日語礼拝が国際伝道会から自立。 12. 美麗島事件。
1980		7. 教団「台湾基督長老教会を考え、祈る会」。 8. 教団「台湾関係委員会」発足。	1～2. 伊藤栄一牧師が台湾伝道。	4. 高俊明総幹事が逮捕、投獄。 4.、長老教会が WCC 再加盟を決議。
1981	3. 残留孤児 47 名初来日。 9. 中国が「一国二制度」を提唱。	11. 教団第 21 会総会に「日本基督教団と台湾教会との連帯を強めること」が建議され、常議員会付託、翌年に承認。	5. 伊藤栄一牧師の台北・高雄・新竹での伝道。 8～9. 頼炳炯牧師が第三回日米クリスチャン大会に参加、巡回伝道。 10. 本田清一牧師の台湾伝道。	
1982	7. 中国による教科書批判がアジア各地に波及。	7. 教団、『台湾教会通信』刊行開始。	2. 玉山神学院視聴覚教室設置に 30 万円献金。 5. 伊藤栄一牧師を台北国際日語教会へ派遣。	

1983	3. 亡命中の 史明の指名 手配を 発表。	7. 教団は林田義行伝道 師を高雄に派遣。 9. 長老教会は張清庚牧 師を宣教師として派遣。		10. NCC 第一次訪中 団。
1984	10. 江南暗 殺。	4. 教団後宮俊夫議長が 長老教会総会に招聘され る。 6. 教団と台湾基督長老 教会の新宣教協約締結に 向けた会合。 9. 国際日語礼拝を教団 中島正昭総幹事が訪問。		5. 中華民国（台湾） 副総統に長老教会信徒 の李登輝が就任。 9. 中国教会代表団訪 日。
1985	3. ゴルバチ ョフがソ連 共産党書記 長に就任。 5. バアイツ ゼッカー演 説。	4. 後宮俊夫教団議長な ど 18 名の代表が長老教 会総会に参加し新協定を 締結。 5. 国際日語教会の成 立。 11. 東神大事務局長の岡 村松雄が国際日語教会主 任牧師に就任。		5. 国際日語教会が南 門教会支会として長老 教会に加入（→88 年 11 月に正式な教会と なる）。

【出典】日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教史年表〔改訂版〕』（教文館、2006 年）のほか、鈴木範久『日本キリスト教史一年表で読む』（教文館、2017 年）、高俊明「台湾の近代化とキリスト教」（『国際基督教大学学報Ⅲ－A アジア文化研究』第 4 号、1967 年）、鄭兎玉「台湾のキリスト教」（呉利民ほか『アジア・キリスト教史（1）－中国、台湾、韓国、日本』教文館、1981 年）、日本基督教団台湾関係委員会編『台湾基督長老教会の歴史と苦難』（日本基督教団台湾関係委員会、1982 年）、日本基督教団台湾関係委員会編『共に悩み共に喜ぶ』（日本基督教団台湾関係委員会、1984 年）、『台湾教会通信』第 1 号～第 60 号（日本基督教団台湾関係委員会、1982 年～2002 年）、藤野陽平「旧植民地にて日本語で礼拝する－台湾基督長老教会国際日語教会の事例から」（鈴木正崇編『森羅万象のささやき』風響社、2015 年）、高井へラー由紀「はじめての台湾キリスト教史」（1）～（12）（『福音と世界』第 72 巻第 4 号～第 73 巻第 3 号、2017～2018 年）。また、日本キリスト伝道会の動向については、『日本伝道通信』各号、『日本をキリストへ』各号、三川茂「日本キリスト伝道会の歩み」（日本キリスト伝道会編『日本伝道の活路』、同会、1983 年）などを参照しながら

ら、著者が作成した。

【註】台湾で発行される『台湾教会公報』などに記載された事項を収録する前の未完成年表であることに留意されたい。

煩雑さを覚悟した上で、戦後日台キリスト教交流史をとりまく主な出来事について、表 4 にまとめてみた。横軸の日本基督教団は、周知の如く合同教会であり、系譜を異にする多くの会派が属した団体である。他方、日本キリスト伝道会は超教派の組織であり、現実として両者の構成は入り組んでいるのだが、前者は NCC（日本キリスト教協議会）に連なる方々、後者は JEA（日本福音同盟）に近い方々をイメージしてほしい。現在、台湾側の主要な史料である『台湾教会公報』で補正作業を進めているが、個人レベルでの交流、あるいは特に 1970 年代以降の会派間での相互訪問が激増した細部には驚きを感じるが、大筋について改編する必要はないと思う。ゆえに以下、表 4 に依拠しながら解説を加えたい。

前述の如く、極めて低調であった日台間のキリスト教交流に大きな変化が発生したのは、1963 年の事であった。同年 3 月、日本基督教団海外伝道委員長岡田五作と台湾基督長老教会総主事黃武東らの間で人事交流の協約が締結された。これは同年 7 月に双方の常議委員会が承認して発効する。プロテスタント最大会派の日本基督教団と台湾基督長老教会との間で宣教協約が結ばれたのである。

これに先立つこと 1 か月、1963 年 2 月にもう一つの主役も誕生している。これが即ち「日本キリスト伝道会」であった。前記した通り、黒田四郎による 1977 年論文（表 1 の 1、表 3 の 17）に附された肩書が、この超教派団体に目を開かせてくれた切っ掛けである。

同会は、平松実馬（1903～1972：高知県人、明学神卒、松山榎町教会牧師）、吉野丈夫（1904～？：奈良県人、日本神学校卒、再度筋教会牧師）、原登（1922～2016：ホーリネス聖書学校卒、小松川教会牧師）が松山に会同して結成が相談され、金井為一郎（1887～1963：長野県人、東京神学社卒、明治学院大学教授）を代表に発会する旨で準備が開始されたが、金井の急病により同年 10 月、島村龜鶴（1900～1993：高知県人、明学神卒、富士見町教会牧師、明治学院院長）を会長、西村次郎（1900～1981：市立大阪商業高校卒、銀行勤務を経て大阪女学院院長）を副会長、原登（前出）を主事、物井又雄（1915～？：新潟県人、郵便局勤務、小松川教会長老）を会計として成立した⁷¹。同会は国内のみならず、在米日系人やアメリカの教会との連携、ブラジル日系人や台湾・韓国への大衆巡回伝道に力を入れていたようだ。

表 4 の如く日本基督教団側による交流は、後に「台湾基督長老教会の苦難の歩みを、

⁷¹ 原登「日本キリスト伝道会」（『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988 年）1050 頁ほか。

協約を結んでいる私たち日本の諸教会は、ほとんど知らないできた」という反省を籠めて総括されたが⁷²、要するに「特に見るべき実績をあげ」なかった。かの「戦争責任告白」⁷³がなされて7ヶ月を経過した1967年10月、協約に基づき菊池吉彌(1913～1986)団長率いる教団の牧師7名が交換伝道のため台湾各地を訪問し、翌年7月には台湾神学院の黄加盛(1910～2005)院長以下5名の牧師が来日した。だが、この一往復のみで交流は途切れたのである⁷⁴。これに反して、表4の略年表には日本キリスト伝道会が主導する交流の旺盛さが窺い知られる。

かかる流れの中で迎えた1970年代であるが、奇しくも日台両国のキリスト教界は、同じ時期に歴史的激流に巻き込まれた。日本側は教団紛争であり、台湾側は1971年の国連追放、72年のニクソン・ショック(米中接近)や日台国交断絶(＝田中角栄訪中)を契機とした危機的な世界情勢に対する怖れと懸念であった。

後述する通り、台湾キリスト教界では長老教会などメインラインを主軸に、様々な教派が各種チャンネルを探し出して、国際的な孤立を防止するための行動をとったのである。これに対して日本を含めた各国の一特に政治的には保守主義に立ち信仰的には福音性をより重視する立場をとる一プロテスタント側も、応答する姿勢を示した。1973年に誕生した敗戦後初めての日本語礼拝－国際日語礼拝－を担う人々の群れも、多くはかかる立場に連なっていた。台湾の場合は、政権側にとってもこの動きは歓迎すべきものであったといえよう。

他方、同じく長老教会のなかでも1970年代初頭の台湾が直面した苦境を目の当たりにして、〈預言者的役割〉を担う事こそが宣教的使命であるとの自覚を深める人々も、〈苦難〉の現場から発言を開始した。こうした中で長老教会は、71年12月に台湾の将来は本省人(古くから台湾に居住する住民)と外省人(蒋介石らと共に台湾へ移住してきた住民)を含めた人民の意思によって決定すべきだという「国是宣言」を発表した。

⁷² 中嶋正昭「苦難を覚えて」(『台湾教会通信』第1号、1982年7月1日)1頁。

⁷³ 戦争責任告白については、鈴木正久「日本教会告白戦争と責任」(『台湾教会公報』第1005期、1967年5月、2頁)に、鈴木自身による記事が掲載されている。但し、全文が「白話字」と呼ばれるローマ字表記であるため、従来は殆んど注目されなかった。

⁷⁴ 岸本羊一「日本基督教団から見た両教会の歴史と問題点」(『共に悩み共に喜ぶ－日本基督教団と台湾基督長老教会の協約締結のために』日本基督教団台湾関係委員会、1984年)15～18頁。なお、協約後初の教団伝道委員会による台湾訪問の記録は、日本基督教団伝道委員会編前掲『台湾交換伝道報告』にまとめられたが、台湾当局の容れない表現を理由に全冊回収されたという。幸いなことに筆者は、同志社大学神学部研究室に所蔵される原誠教授からの寄贈本を閲覧することができた。ちなみに1967年11月、長老教会前議長だった新竹教会の鄭連坤牧師が来日、11月5日に菊池吉彌が牧会する下谷教会で説教を行った記録もある(『日本キリスト教団下谷教会百年史』、1979年、75頁)。

「反攻大陸」こそ自らの使命だとする政権側からすれば、好ましからざる傾向である。しかし、いわゆる「社会派」を含めた日本側の反応は、非常に緩慢であったのだ。

※ ※

本章では、三つの角度から「秘話」誕生の歴史的背景を眺めてみた。要するに戦後の様々な問題が一触即発の状況となり、変革／ゲバルトの時代にキリスト教界も巻き込まれ、かつ分裂と対立を繰り返していた時代に揺られながら産声をあげたのである。この時代は世界史的にも「造反学生」という表現にある通り、各地で若者たちが従来の権威や権力に抵抗する現象が世界的なブームだったともいえるだろう。

次章では、かかる時局と「秘話」を語った人々との具体的な関係性について検討したいと思う。

第九章 「秘話」を発信した人々

第1節 三人の発信者

既にみた表1に一目瞭然であるが、「秘話」は1970年代後半に、突如として語られるようになった。黒田四郎（1896～1989）牧師と三浦綾子（1922～1999）女史、そして加藤正義（1915～？）牧師である。一見した印象では個別の作品のように見えるが、彼／彼女らが遺した史料を丹念に読み解く作業を通じて、その「近しい」関係性が浮かびあがってきた。

即ち、黒田四郎は「神の国運動」以降、賀川の最側近であった。三浦綾子の場合も、単なるクリスチャン作家と見るべきではなかろう。その証詞的作品には、長尾巻（1852～1934）、賀川豊彦（1888～1960）、舛崎外彦（1890～1976）、伊藤栄一（1904～1995）、本田弘慈（1912～2002）などの牧師、あるいは文書伝道で活躍した田中芳三（1919～2013）等をしばしば登場させており、稀有の信徒伝道者を支えた人脈が窺い知られる。

唯一、経歴などが詳らかでなかった加藤正義の場合、東京キリスト伝道館のホームページに以下の紹介がみられた。

加藤正義 初代牧師：加藤師は、柴川いわさんによって救いに導き入れられ、松本キリスト伝道館の三宅醇三先生の下で指導を受け、その後、日本大学で教鞭をとりながら、東京キリスト伝道館を始めました。／加藤正義師が、献身に導かれた聖書の御言葉は、「汝は我に従え」（ヨハネの福音書 21 章 22 節）で、それは「鳩のように素直な信仰によってキリストに従い、信徒一人一人がキリストの御姿に変えられることであり、永遠のいのちの希望であるイエス・キリストの福音を全世界に伝える」という神の大きなご計画を継承するものでした。／そのビジョンを抱きながら、自宅を開放し家庭集会から開拓を始め、自宅近所だけにとどまらず各地を歩きながら貧困している人々に助けの手を差し伸べ、刑務所・少年院に度々出向く

など、多くの人たちにキリストの愛を伝えました。そうした刑務所・少年院での青少年の育成や更生に貢献したことを賞され、紫綬褒章を授与されました。／また、『百万人の福音』の短歌の選者を務める他、70冊以上の著書があるなど執筆活動も盛んに行い、日本の教会の活性化、福音を広く伝えることに多大な功績と影響を残し、福音功労賞など数多くの賞を授与されています⁷⁵。

これまでの観察、及び表4の略年表を熟視された読者諸賢には、およその粗筋が予測できたのではなかろうか。要するに、彼／彼女らは、いずれも「日本キリスト伝道会」と、直接乃至間接的に関わっていたのである。以下、日台キリスト教交流史における同会の動向を少しく丁寧に追跡してみよう。

第2節 日本キリスト伝道会と台湾

〈1960年代後半〉

日本キリスト伝道会の記録によれば、1966年4月、益田泉（1908～1983）女史が台湾伝道に赴いた。これが管見の限り最も早い同会と台湾との交流である。

益田は、ホーリネス教会の丹羽平三郎牧師の二女として生まれた。後に『毎日新聞』記者だった配偶者とともに大連に渡り、戦時中にロシア語通訳をしていた関係で1949年にソ連軍によって逮捕され、1953年に帰国するまでシベリア収容所を転々とした特異な経歴を持つ⁷⁶。

訪台の目的は、台湾には「現地人と結婚した、日本婦人が多くおり望郷の念やる方なく、中には不幸な境遇の中に沈んでいる人も多い」が故の問安であった。この「渡台に関する一切の御世話は、日本海外宣教会の大森三郎師が」担当した⁷⁷。訪問自体は台湾聖經公会（The Bible Society in Taiwan）による招待であり、「公会の理事たちは国家的に重要ポストにある人達が多く、頼（炳炯……引用者）牧師はこれらの高官がたを動かし」た結果、10日間だけの通過ビザを延長した上で現地滞在が可能になった、という。合計で28教会（うち15は山地教会）、2つの聖經学校、1つの神学院で奉仕、54回の公演で8990人の聴衆を得たとされ、山地での講演は日本語で行われた⁷⁸。ちなみに彼女は、かつて島村龜鶴会長が牧する富士見町教会CSの生徒でもあり、旧知からの人選であったともいえるだろう⁷⁹。

⁷⁵ 「東京キリスト伝道館：伝道館の歴史」 [<https://dendoukan.jp/about/dendoukan/>：最終閲覧日：2024年4月10日]。

⁷⁶ 花森勲一「益田泉」（『イエスの友会人物伝』同会、1984年）146頁。

⁷⁷ 「益田泉女史の台湾伝道」（『日本伝道通信』第8号、1966年2月10日）3頁。

⁷⁸ 「第一回台湾伝道報告」（『日本伝道通信』第10号、1966年6月20日）3頁。

⁷⁹ 「台湾伝道打合せ」（『日本伝道通信』第8号、1966年2月10日）3頁。

益田泉はその後、1966 年 10 月に沖縄・台湾で伝道⁸⁰、1967 年 8 月から 10 月の台湾聖經公会の招聘による澎湖島を含む全土の巡回に際しては、大阪朝禱会からの献金による聖書 500 冊を寄贈したと報告される⁸¹。何れにせよ彼女は 1960 年代後半における日本キリスト伝道会と台湾との交流の主たる担い手となっていたのである。

1968 年 8 月から 9 月、加藤正義と台湾との関係が遂に史料に刻まれた。即ち、アジア福音宣教会からの要請を受け、イエス・キリスト教団・橋本巽牧師、インマヌエル教団・南場秋子牧師、日本基督教団・原田要牧師ら総勢 20 名の超教派間安団であり、台湾で宣教していたカベナント教団・松元茂牧師が現地での案内役を担ったようだ。一行の訪問先は長老会山地教会を中心としており、玉山神学書院（8 月 13 日～16 日）、屏東県の中村教会（20 日～23 日）、南投県の霧峯教会（27 日～30 日）、新竹聖經書院（9 月 2 日～5 日）で活動した。そして注目すべきは、ここで加藤の蔣介石と宋美齡に対する強烈なシンパシーが明かされた事実である⁸²。彼は、1973 年 7 月から 8 月に実施された総勢 77 名からなる日本キリスト伝道会ブラジル訪問団の班長として初めて機関誌に登場するが⁸³、台湾との交流は 60 年代後半に開始していたのである。なお、1969 年 6 月中旬には、原登が沖縄と台湾を伝道したというが、詳細な活動内容は見えてこない⁸⁴。

〈1970 年代前半〉

日本キリスト教界が大揺れした 1970 年頃から、福井二郎（1899～1983）と黒田四郎が日本キリスト伝道会エバンジェリストとして誌面に登場するようになる。日台双方とも波乱万丈な時期だといえよう。

この時期の衝撃的な出来事は、なんといっても 1972 年 9 月の日台（華）国交断絶だろう。これに際して台湾側の胡茂生（1925～2012：台南神学院卒）牧師から、「台湾と日本の政治上の断交となりましたが、我々主を一つにする信者達はお互いに力を合せて神の国の為正義の為に働くべきです。政治は我々の信仰、我々の愛を引き離す事が出来ません」とメッセージが寄せられ⁸⁵、同年には台湾聖經公会の招きにより教団月寒教会

⁸⁰ この訪問においては、長老教会北部中会がスケジュールの調整などに従事したという。詳細は、渡久山寛三「沖縄・台湾伝道」（『日本伝道通信』第 11 号、1966 年 10 月 10 日）2 頁。

⁸¹ 益田泉「第三回台湾聖經公会の招聘による使命をはたして」（『日本伝道通信』第 14 号、1967 年 11 月 20 日）1～3 頁。

⁸² 加藤正義『白鳩叢書 15 第五歌集 台湾』（白鳩社発行、いのちのことば社発売、1968 年 12 月）78～80 頁、及び 99～116 頁に、台湾での記録が詳しい。

⁸³ 原登「ブラジル訪問団結成」（『日本伝道通信』第 38 号、1973 年 6 月 15 日）3 頁。

⁸⁴ 原登「沖縄伝道」（『日本伝道通信』第 19 号、1967 年 7 月 10 日）2 頁。

⁸⁵ 胡茂生「通信」（『日本伝道通信』第 36 号、1972 年 12 月 15 日）4 頁。

の定家都志男（1906～1996）牧師が、10 教会で巡回伝道を行っている⁸⁶。

国連追放や米中接近、そして日台国交断絶などの苦境に耐えるべく、台湾キリスト教界もまた各方面と接触を深め、苦境から抜け出す道を模索していた。表 3 における黄彰輝（1914～1988）元議長ら長老教会幹部の相継ぐ訪日などもその表れであるが、こうした中で 1973 年 2 月 1 日、台湾国際伝道会が成立する。台湾聖經公会主任だった賴炳炯（1913～2015：嘉義県人、台南神学院卒）が理事長に就任し、副理事長は林自西（1905～1980：林商號合板公司創設者）と高俊明（1929～2019：台南神学院卒、長老会総会議長）、総幹事に胡茂生など長老教会関係者が幹部に名を連ねる同会は、超教派的な親睦や青少年教育、在台外国人クリスチャンとの交流を促進すべく様々な事業を開始したのであった⁸⁷。

ところが、同時代史的な混迷に呻吟する日本基督教団側の組織的な対応は困難であり、「協約」の枠外で交流を模索したのであろう。1973 年 10 月、国際伝道会附設国際日語礼拝は、新生教団新生会館を借用して誕生した。牧師として教団の加藤実（1934～2015）が招聘される。東京外国語大学中国語学科卒業後に東京神学大学で学んだ加藤は、平塚・二宮での牧会を経て香港や台北で伝道活動を行い、後に合肥や武漢でも働きを重ねた人物である⁸⁸。この記念すべきスタートを覚えて聖書 100 冊が送られたが、寄贈元は日本キリスト伝道会であった⁸⁹。やがて日台間の教会交流は、1975 年 8 月に韓国を含む組織へと拡大する。すなわち、

中華民国台湾省国際伝道会理事長賴炳炯牧師の来日に際し、日本キリスト伝道会会長島村龜鶴、副会長西村次郎、実行委員長原登、エバンジェリスト宮内俊三、実行委員関栄二は、賴牧師の要請に従い日華韓三国教会の友好交流及び協力関係の推進について話し合い、次のような合意に達した。1. 日華韓三国教会の協力推進に関する賴炳炯牧師の要請に対し、その主旨を感謝をもって了解した。2. 今後の三者の協力関係の発展を期待し、三者の独自の主体的活動を尊重しつつ、可能な限り必要に応じて相互の協力関係をおし進めることを了解した。3. しかるべき適当な時期に、上記の案件について三者の協議会を開くことを認め、その連絡方を賴炳炯牧師に一任した。願くは、父子聖霊なる神の祝福と導きが、三国教会の上に豊かな

⁸⁶ 定家都志男「恩寵の軌跡」（『日本をキリストへ』第 95 号、1980 年 4 月 25 日）3 頁。

⁸⁷ 賴炳炯口述・黃莉雯編撰『凡事感謝 賴炳炯牧師傳道記事』（天恩出版社、2011 年）115～119 頁。

⁸⁸ 伊藤義清『教界人物地図』（教友社、2004 年）198～204 頁。

⁸⁹ 「台湾の国際日語礼拝開始」（『日本伝道通信』第 39 号、1973 年 10 月 15 日）3 頁。
なお同号で、武藤富男（1904～1998）と伊藤栄一のエバンジェリスト参加も報じられた。

らんことを。(アーメン)⁹⁰

と見える通り、台湾国際伝道会—日本キリスト伝道会ラインの働きで、やがて東北アジア教会宣教協議会へと発展する連携が生れたのである。

〈1970 年代後半〉

その後の日台教界交流も、絶え間なく続けられた。1975 年 10 月に開催された台湾ビリー・グラハム伝道大会には、三川茂牧師（1930～？：関西聖書神学校卒、日本同盟基督教団三島六反田教会牧師）を代表とする訪問団を派遣し、1976 年 1 月には伊藤栄一牧師が台湾伝道に派遣される。1976 年 3 月から頼炳炯牧師が日本各地を巡回伝道⁹¹、77 年 5 月には、台湾国際伝道会の招聘による再び伊藤栄一の訪台⁹²、78 年 11 月から 12 月にかけて伊藤栄一の三訪⁹³、1979 年 1 月の諸貫香恵子と古川和美による伝道など⁹⁴、活発な交わりが確認される。

更に、地道に継続した物的支援にも、わたくしたちは注目せねばならない。1977 年 4 月、会計責任者の鈴木留蔵が玉山神学院に電話敷設料金として現金 60 万円を持参したことを皮切りに⁹⁵、経済的苦境にあった新竹聖經学院への総額 60 万円に達した献金などが逐一報じられる⁹⁶。

こうした中、1977 年 8 月に開催された「第九回日本伝道の幻を語る会」における頼炳炯の講演に、国際伝道会の時局観が如実に反映している。

現代一番大きい危機は何でしょうか。それは共産主義と自由主義の戦いです。有

⁹⁰ 「覚書 一九七五・八・一四」（『日本伝道通信』第 45 号、1975 年 9 月 10 日）3 頁。

⁹¹ 三川茂「日本キリスト伝道会の歩み」（『日本伝道の活路』日本キリスト伝道会、1983 年）228～230 頁。

⁹² 「伊藤栄一師再び台湾伝道へ」（『日本をキリストへ』第 59 号、1977 年 4 月 10 日）2 頁、及び「頼牧師より」（『日本をキリストへ』第 60 号、1977 年 5 月 10 日）2 頁。

⁹³ 原登「全体協議会報告」（『日本をキリストへ』第 80 号、1979 年 1 月 25 日）2 頁。

⁹⁴ 頼炳炯「台湾伝道報告」（『日本をキリストへ』第 81 号、1979 年 2 月 25 日）3 頁。

⁹⁵ 「台湾玉山神学校へ電話を送る！」（『日本をキリストへ』第 59 号、1977 年 4 月 10 日）2 頁、及び「台湾玉山神学校感謝状」（『日本をキリストへ』第 67・68 号、1978 年 1 月 10 日）3 頁。

⁹⁶ 新竹聖經学院に対する支援は、原登「全体協議会報告」（『日本をキリストへ』第 80 号、1979 年 1 月 25 日）2 頁、頼炳炯「台湾伝道報告」（『日本をキリストへ』第 81 号、1979 年 2 月 25 日）3 頁、原登「本部便り」（『日本をキリストへ』第 89 号、1979 年 10 月 25 日）2 頁などに詳しい。

神と無神とが戦っているということです。大陸には教会は沢山ありましたが今では教会の働きは許されず信者は大変困っています。……なぜ共産は孔子を攻撃したりするんでしょう。それは孔子は天の神様を拝んでいるからです。だからもしまだ天があるとしたら、共産の頭は世界の神様の下にありますからそれはできないんです。日本の戦争当時もそうでした。「天皇が偉いか、キリストが偉いか。」と問われ、「キリストです。」と答えて獄一年です⁹⁷。

要するに、信仰を守るための《防共の連帯》である。そして、かかる文脈に沿って実施されたのが、1978年4月5日に開催された蔣介石総統召天三周年記念会だったのである。日本キリスト伝道会はメッセージを益田泉団長に託した。その詳細は、

蔣介石総統三周年追恩合同礼拝が挙行されるにあたり、益田泉女史を団長とする一行、二十二名は、日本キリスト伝道会々長島村龜鶴師のメッセージを携えて行って参りました。四月五日、夕七時三〇分より礼拝は台北市内のメソジスト教会で行われ、参会者、約五百人、ちょうドルーテル・アワーラジオ牧師、正木茂師を中心とする台湾伝道ツアーの一行と合流して日本人勢は総勢三十名程でした。合同礼拝委員長雷法章先生（総統府国策顧問）をはじめ、特別に双連教会の名誉牧師、陳先生御懇篤なる御配慮により、前方に特別な座席を与えられた我々は、……。引続いて、益田泉女史が立って、約五分間に亘り、蔣介石総統が日本の為に、いかにキリストの愛を以て、御配慮下さったかについて語り、今日の日本の繁栄が、全く蔣総統のあの時の愛の決断に由来することを述べ改めて、感謝の辞を重ねました⁹⁸。

と記されるが、これはなんと加藤正義によって報じられていたのだ！ 後のトラクトの原型はこの過程で構想された、と思量される。

なお1977年にソウル、翌78年には台中で持たれた日台韓教会宣教協議会には、西宮教会・棟方文雄（1911～1995）牧師や弓町本郷教会・定家修身（1937～）牧師の出席も確認できる。何れも、聖ヶ丘教会・稲垣守臣（1912～2013）牧師の紹介による訪問であり、同志社系にまでネットワークが拡大した状況を垣間見ることができるだろう⁹⁹。

⁹⁷ 頼炳炯「現代における人間の危機」（『日本をキリストへ』第64号、1977年9月1日）1頁。

⁹⁸ 加藤正義「台湾の報告」（『日本をキリストへ』第71号、1978年4月10日）4頁。

⁹⁹ 定家修身は加藤正義トラクトに登場する定家都志男の子息であり、後に教団の関台湾関係委員会で活躍する。また棟方文雄の場合、信仰的には近しい立場にあるだろう日本キリスト伝道会に関わる人々の台湾観とは正反対に、「台湾独立」の必然性を匂わせる報告を公表した点が、たいへん興味深い。詳しくは伊藤義清「定家修身」（『教界人物地図』教

〈1980 年代前半〉

この時期の日本キリスト伝道会による台湾宣教は、伊藤栄一によって担われるようになった。1970 年代に 3 回の訪台歴を持つ伊藤であるが、1980 年 1 月 24 日から 2 月 11 日に島内各地¹⁰⁰、1981 年 5 月は台北・高雄・新竹と伝道を重ね、「本年四月のイースターから教会として発足（むずかしい現地の手続きはこれからですが）、四人の日本人受洗者も与えられて、まことに前途に希望を持たされておりますので、……」と、単なる礼拝から正式な教会への昇格が意図されていたようである¹⁰¹。

1981 年 8 月から 9 月には、頼炳炯の第三回日米クリスチャン大会参加と日本巡回伝道が実現した。「同師は日本語に堪能で、すばらしい牧会説教をされます。……御希望者は伊藤栄一師に各々御申込ください」とある通り¹⁰²、伊藤栄一が仲介者の労を担っていたのである。また 1981 年 10 月 1 日から 9 日、本田清一（1912～2006）牧師が訪台した。『街頭の聖者高橋元一郎』（関谷書店、1936 年）の作者でもあった彼は、短期間に数回「高俊明先生のために祈る受難祈祷会」にも参加した、という¹⁰³。

1982 年 3 月初旬には、「台湾の玉山神学校鷹羽富美子師より、視聴覚教室設置への協力献金として、本会より三十万円送金した事についての御懇切な礼状が届きました……」という記事と共に、「伊藤栄一師を、四月より一年間、台湾の日本人教会への牧会のため、派遣することが決定いたしました」とあり¹⁰⁴、矢内原忠雄門下生であった医師の郭維租（1912～2022）を会長に戴く現地側の準備状況も速報される¹⁰⁵。5 月 19 日に台北入りした伊藤であるが、5 月 23 日時点で指定献金が 111 万円に達した

友社、2004 年）206 頁、及び本稿補章を参照されたい。

¹⁰⁰ 伊藤栄一「伝道報告」（『日本をキリストへ』第 93 号、1980 年 2 月 25 日）3 頁。原登「本部便り」（『日本をキリストへ』第 104 号、1981 年 1 月 25 日）3 頁。

¹⁰¹ この事前折衝は、「頼炳炯師より」、及び「片山ノブ氏より」（『日本をキリストへ』第 106・107 号、1981 年 4 月 25 日）6 面を参照。訪問記は、伊藤栄一「第五回台湾伝道報告」（『日本をキリストへ』第 109 号、1981 年 6 月 25 日）3 頁。

¹⁰² 原登「本部便り」（『日本をキリストへ』第 110 号、1981 年 7 月 25 日）4 頁。及び「祝福された歓迎大会とセミナー」（『日本をキリストへ』第 112 号、1981 年 9 月 25 日）8 頁。

¹⁰³ 「頼炳炯師より」（『日本をキリストへ』第 106・107 号、1981 年 4 月 25 日）6 面、及び本田清一「台湾巡回伝道」（『日本をキリストへ』第 114・115 号、1981 年 11 月 25 日）3 頁。

¹⁰⁴ 原登「本部だより」（『日本をキリストへ』第 118 号、1982 年 3 月 25 日）2 頁。

¹⁰⁵ 会長郭維租・主席役員加藤敬一・役員会一同「台湾国際日本語教会」（『日本をキリストへ』第 119 号、1982 年 4 月 25 日）6 頁。

という¹⁰⁶。その後の状況も随時会誌に紹介され¹⁰⁷、日本キリスト伝道会の旺盛かつ実直な活動が彷彿とする。帰任した伊藤は、次のように回想した。

（台湾には）前後19回まいりました。特に台北には日本人が一万ぐらいおりまして、そこには国際日語教会という日本語の礼拝をしているところがあります。台湾伝道へ行きその教会にまいる度毎に、かつて私が北京伝道に行ったときのことが思い出されるのです。つまり、日本人が本当にキリストの福音によって教われて、神の子として中国の人に接しなければ、本当の良い交わりができないということです。ですから台北に日語教会、日本語の教会ができることは必要ですし、良い日本人が台北にあって、台湾の方や各国の人たちと交わることができるように、何よりの働きの一つは、福音によって教会ができて日毎教会の会員がたくさん生まれることの大切さを覚えて、私も一生懸命にお手伝いを致しました。そうしたらだんだんと皆さんが迎えて下さって、とうとう昭和60年5月26日、聖霊降臨祭の日、それまで持っておりました台北日語礼拝は台湾キリスト長老教会に属して、台湾キリスト長老教会国際日語教会として、新しい出発を致しました¹⁰⁸。

以上、1980年代前半に至るまでの期間、日台キリスト教交流の組織的推進者は、「福音重視」を明言する超教派団体たる日本キリスト伝道会、あるいは福音派個人による活動の独壇場であった。この事実は、是非とも強調しておきたい¹⁰⁹。

※ ※

¹⁰⁶ 原登「本部便り」（『日本をキリストへ』第121号、1982年6月25日）2頁、及び伊藤栄一「台湾」（『日本をキリストへ』第121号、1982年6月25日）4頁。

¹⁰⁷ 例えば、伊藤栄一「台北」（『日本をキリストへ』第122号、1982年7月25日）4頁、伊藤栄一「台北」（『日本をキリストへ』第124・125号、1982年9月25日）6頁、国際日本語基督教会役員会「台湾」（『日本をキリストへ』第126号、1982年11月25日）4頁など。後任者の問題については、「台湾伝道」（『日本をキリストへ』第128号、1983年1月25日）4頁。台湾側による感謝については、頼炳炯「台湾」（『日本をキリストへ』第134号、1983年7月25日）4頁などを参照。

¹⁰⁸ 伊藤栄一『主は生きておられる』（日本キリスト教団鴨島兄弟教会、1987年）。

¹⁰⁹ なお、やはり台湾当局からの監視を受けながらも、熱心な宣教を続けた無教会の高橋三郎（1920～2010）の働きについても、詳細な検討が必要であろう。国際日語教会の設立に際して矢内原集会で育った無教会メンバーが深く関わっていた事実も、たいへん興味深い。また、高橋の著作の多くは長老会系の教会公報社によって翻訳・出版されている。特に高橋三郎『神の国と地の国』（教文館、1979年）に纏められた交流記録は、重要な証言であろう。

ほとんど同じ時期に、日台交流の新しい担い手も現われた。1978年12月初旬、教団総幹事の中嶋正昭（1928～1996）牧師が訪台する。長老教会台湾神学校で開催された宣教協議会への参加が主な目的であったが、「国是宣言」（71年12月）に続く「われわれの呼びかけ」（75年11月）、「人権宣言」（77年8月）に連帯する意図が窺われていた。

すなわち「台湾の運命を大国の取り引きの材料にするのでなく一千七百万の台湾住民の意思によって決定させよとの訴えをするとともに、三十年来戒厳令の下に弾圧政権をとっている国民党政府に対し、総選挙の実施を含む民主化を要求し」た結果、「国民党政権の逆鱗にふれ……、弾圧の手はますます厳しく、教会指導者の海外旅行は全く許可がおりず、次第に世界教会の交わりから締め出され」た長老教会を、欧米アジアの姉妹教会の代表とともに激励せんとしたのだ¹¹⁰。

「台湾基督長老教会の苦難の歩みを、協約を結んでいる私たち日本の諸教会は、ほとんど知らないできた」¹¹¹旨の反省と共に、台湾当局を迫害者と示唆する発言は、1960年代以降に日台キリスト教交流を担った人々が公表できる埒外にあった。そして「やっ」と韓国の教会と台湾の教会の課題が、自分の課題そのものだ¹¹²という、《闘いの連帯》が生れたのである。爾後、長老教会主流が徐々に「大中華」派から「台湾国」派へと移行した状況が、かかる認識にとって幸運に作用した¹¹³。ともあれ、ようやく教団次元における「協約」が機能する段階を迎えたのである。その後の展開は表4の通りであり、ここでは繰り返さない。

第3節 日本キリスト伝道会の時局観

次に、日台交流を支えた日本キリスト伝道会のメンバーの時局に対する評価について、1970年代を中心として簡単に整理しておきたい。

1969年7月には、「大学紛争が深刻化し、神学生共闘会議すら結成せられて、教会にもゲバ棒の脅威が迫ってきました」¹¹⁴と、世俗での混乱が教会に及ぶ影響への危惧が表明されるが、教界における紛争の引き金となった大阪万博開幕後になると、キリスト教館開館後100日間の正午礼拝参加者約2万人との実績を述べた後、「その参加者の九

¹¹⁰ 中嶋正昭「台湾教会との連帯を－台湾長老教会を訪問して」（『教団新報』第3917号、1978年12月23日）4頁。

¹¹¹ 中嶋正昭「苦難を覚えて」（『台湾教会通信』第1号、1982年7月1日）1頁。

¹¹² LOK「美麗島」（『台湾教会通信』第1号、1982年7月1日）1頁。

¹¹³ 台湾長老会内部の変化については、鄭睦群『從大中華到台灣國：台灣基督長老教會的國家認同及其論述轉換』（政大出版社、2017年）を参照されたい。

¹¹⁴ 「日本伝道、これで行こう！」（『日本伝道通信』第19号、1969年7月10日）1頁。

○パーセントが青年層である……。反動に若さをぶつけて闘う青年もあれば、真剣に真理に聴こうとする青年もある……。会が終わって質問に来る青年が少なくないが、その質問の内容が幼稚である……。キリスト教について何も知っていない……。以上の二つに驚きから反省させられることは、現在の教会が如何に伝道を怠っているかと言うことである。いかに独善であり閉鎖的であるかと言うことである」という反省が、大阪女学院の西村次郎から表明された¹¹⁵。

会長の島村龜鶴も、「伝道ということは、キリストに従う事が好きなのだ、キリストが人を導くんだから、自分も人を導くという事であって、体験論から或は世界観から伝道するという様な本末転倒した事ではありません。……社会問題、経済問題、国際問題を論じ肝心要のものをやりませんと教会そのものが倒れてしまいます」と述べ、伝道中心主義のなんたるかを強く説く¹¹⁶。

1971年5月に原登は、「日本キリスト教団東京教区は黒ヘルメットの暴力集団のために総会が出来ずに流会しました。これは、数名の造反教師と結託した悪質な暴徒の襲撃でありました。……日本の教界は、教勢がいちじるしく低下し、このままでは大きな陥没がおきるのではあるまいかと危険視されています」と、いわゆる「造反」派への批判を強めた¹¹⁷。

翌72年1月、聖隷クリストファー創設者である長谷川保（1903～1994）は、「有史以来の経済的発展と科学技術の発展に有頂天になっていた日本国民、中国の文化大革命に影響されて暴力主義のとりこになっていた青年達、彼らがその空しさを身に秘みて（ママ）知った」のが1971年であったと振り返る¹¹⁸。

このように、当時のキリスト教界をとりまく「流行」に対して、非常に懐疑的かつ批判的な論調が誌面を埋めている。これは、海外からの同労者も同様であった。前出の頼炳炯牧師が示した反共至上論は、エバンジェリストとして活動した韓国の車潤順（1933～？）による北朝鮮軍による暴行の告発、金俊坤（1924～2009）のキャンパスクルセードを通じた学園防共などにも、如実に共有されていたのである。

余談ながら、これら史実を以てしても、現在は所与の枠組みとして用いられる「福音」派と「社会」派といった一見すると世界を見事に切り分けるが如き一二項対立的でかつ「わかり易い」概念の有害性が詳らになる。なんとなれば、本章で登場した牧師や信徒たちは、保守的と称することができるかも知れないが、社会福音の推進と実現に熱心な方々であった。つまり「福音も社会も」派なのだ。新しい枠組み／呼称の登場が熱

¹¹⁵ 西村次郎「二つの驚き」（『日本伝道通信』第23号、1970年7月15日）1頁。

¹¹⁶ 島村龜鶴「キリストの直属者」（『日本伝道通信』第26号、1970年12月25日）1頁。

¹¹⁷ 原登「本部便り」（『日本伝道通信』第29号、1971年6月15日）1頁。

¹¹⁸ 長谷川保「新年の辞」（『日本伝道通信』第32号、1972年1月15日）3頁。

望される所以である¹¹⁹。

第4節 『クリスチャン・グラフ』誌による賀川豊彦／蒋介石の顕彰

最後に、附論的ではあるが『クリスチャン・グラフ』という雑誌が果たした役割について簡単に触れておきたい。同誌は日曜世界社の創立者であった西阪保治が大正期に創刊した『キリスト教家庭新聞』の系譜に連なる刊行物であり、何回かの改称を経て、梅田安之牧師が編集担当の時代に『クリスチャン・グラフ』と名乗り始めた¹²⁰。同誌をまとめて所蔵する図書館が少ないため、本稿の執筆当時は現物の確認に往生したが、脱稿直前に至り大阪女学院の「学院史資料室」に保存されていることが判明した。

本稿でも登場する西村次郎が理事長を担った学校法人であり、大阪キリスト教界の指導者的役割を果していたため、かかるマイナーな雑誌も丁寧に収集かつ保管していたのであろう。これらを閲覧した結果、本稿でみた黒田四郎「世界を動かした賀川先生の祈り」(『クリスチャン・グラフ』第384号、1978年7月)以降、同誌を舞台に賀川豊彦、そして蒋介石をしきりに顕彰する「秘話」が数多く語られていた事実を発見した。そのなかには、歴史的かつ状況的に「眉唾もの」と判定せざるを得ない「逸話」も多くみられるが、1970年代後半の日本キリスト教界で、「賀川豊彦」と「蒋介石」を褒めたたえる潮流が存在していたことを確認すべくリストを作成し、後日の検討を俟ちたい。

【1970年代】

「追思礼拝参加記」(『クリスチャン・グラフ』第385号、78年8月)；山崎宗太郎「蔣總統の靈前に祈る」(第385号、78年8月)；加藤正義「蔣介石總統の靈前にて讃美した讃美歌『主よみもとに近づかん』」(第385号、78年8月)；長尾己「蔣介石と私」(第397号、1979年8月)；田中芳三「清水安三物語(十九)」(第404号、1980年3月)；本田清一「台湾で学んだこと」(第426号、1982年2月)；

【1980年代】

田中芳三「私の台湾の旅」(第426号、1982年2月)；黒田四郎「日本の運命を大きく変えた人物たちの話」(一)～(三)(第428号～第430号、1982年4月～6月)；黒田四郎「大戦後の蔣介石大總統と賀川先生」(第431号、1982年7月)；小川秀一「敗戦の日の思い出」(第464号、1985年8月)；加藤正義「長尾己画伯と蔣介石」(第465号、1985年9月)；長谷川太郎「昭和20年8月15日、日本国敗戦。重慶より蔣介石總統が全中国と世界に向けてラジオ放送された演説の全文」(第495号)；田中芳三「賀川先生

¹¹⁹ いわゆる「福音」派の社会認識については、例えばカール・F・ヘンリー著、福音主義神学会訳『キリスト者の社会責任』(いのちのことば社、1980年)を参照されたい。

¹²⁰ 田中芳三「クリシチャングラフ」(『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年)463頁。

が私宅にお泊り下さったある日の賀川先生と私との雑談の中の一齣」(第 497 号、1988 年 7 月)；

【1990 年代】

長谷川太郎「一九四五年八月十五日中華民国国民政府蔣介石主席終戦のメッセージ(告示)」(第 522 号、1990 年 8 月)；賀川純彦「日米開戦と賀川豊彦」(第 543 号、1992 年 8 月)；田中芳三「蔣介石氏の読んだ聖書」(第 543 号、1992 年 8 月)。

補章 棟方文雄の台湾観について——一九七八年の訪問記を読む——

第 1 節 棟方文雄とは誰か？

生涯に亙り台湾とは全くといって良いほど無縁だった牧師が、本章の主人公である。はじめに、その横顔の紹介から筆を起こそう。

棟方文雄 一九一一年(明治四十四)九月二十五日生／一九八八年(昭六十三)三月十八日永眠

弘前で誕生、青山学院英語師範科を卒業して同志社大学神学部編入学、一九三六(昭十一)年三月卒業後一年間大学院で研究を積み、京城教会伝道師に迎えられた。一九四〇(昭十五)年十月十三日按手礼を領し副牧師に就任。一九四一(昭十六)年七月辞して武庫教会牧師に招聘された。戦争の激化に伴い教会員の多くが離散、少数で礼拝、聖研は続けられた。一九四五(昭二十)年西宮教会を兼牧、間もなく両教会は空襲により焼失、その中で六月に長女を、十月に長男を失い、夫妻は赤痢の為入院と言う苦汁を嘗め乍ら立ち直り、一九四八(昭二十三)年三月両教会を合して西宮教会を設立、礼拝出席百六十名を数える教会に成長した。

一九六二(昭三十七)年四月同志社大学神学部教授に迎えられ兼任したが、教会牧師として召され之に一生を賭けている先生は四年間で辞し牧会伝道に情熱を傾けた。東に兄功、西に弟文雄、すばらしい兄弟牧師であった。一九七九(昭五十四)年夫妻で西独日本人教会へ伝道の為赴き、ケルン・ボン日本人教会を設立、二年後に帰任。自由自主独立の組合教会精神を重んじ、又礼拝説教に全力を注ぎ之にいのちをかけた。病魔は序々に進行し、一九八八(昭和六十三)年一月中旬入院三月十八日遂に勇者は倒れた。七十七歳。子息晃彦は牧師となり父の志を継いだ¹²¹。

この略伝では省略されているが、1949 年からは聖和女子短期大学の講師(後に教授)を兼務し、また教会合併とともに附属こひつじ幼稚園を開園、園長職を担ったが、前者は 1966 年に辞任している。伝道師として最初の赴任先が植民地の京城であつ

¹²¹ 『天上之友』第三編、基督教世界社、1988 年、292 頁。

たこと以外、その人生とアジアとの交差も少なく、実践神学担当の教授として同志社に奉職した時間も短かった。要するに、牧会の現場を己が召命とした聖職者だったといえるだろう。

第2節 ふたたび「1978年」

旧組合派機関誌である『基督教世界』の戦後刊行分をブラウジングする過程で、筆者は想定外な紀行文を目にした。すなわち、棟方文雄「台湾、見たこと聞いたこと」である¹²²。1970年代という時代は、日本キリスト教界のみならず台湾の教界にとっても激動の最中であったため、現在に連なる様々な問題がにわかに表面化してくるのだが、その生涯で台湾に重なる経歴を持たず、かつ西ドイツ伝道に出発する直前段階にあった棟方牧師が隣国・台湾の地に一生涯ただ一度とはいえ一足を踏み入れていたこと自体に驚いた。後に確認したところ、この一文は彼の文集である『真実の教会を求めて』（日本基督教団西宮教会、1988年）にも再録されていたが、棟方と台湾の邂逅は、実に不思議な取り合わせだと感じたのである。

だが記事を読み進めて行くうちに、当初とは異なる次元の興味が湧き出した。なんとなればこの時期は、日本側は様々な現場における〈闘争〉を内因としながら、大揺れの渦中にあった。台湾側も国連からの追放や日台国交断絶、アメリカの中国接近など国際的な孤立が加速した転換期である。それゆえに、この時期の相互認識は極めて錯綜しているのであるが、棟方のそれは日本キリスト教界のなかでも先駆的な展望を抱いていたからである。小文では〈1978年〉における棟方文雄の台湾観の解読を通じて気付いた事柄について、少しく考察したいと思う。

第3節 日台キリスト教交流史のおさらい

本論に入る前に、ざっと歴史をおさらいしておきたい。

日清戦争の結果、台湾は50年間にわたり日本の「外地」として統治された。激しい抵抗運動も昭和初年以降には収束して、さまざまな限界は残しながらも相対的に安定した状況になってきた。キリスト教の場合、日本支配が開始する前から存在していた欧米ミッションによる伝道活動に加え、日本基督教会を中心とした宣教が試みられ、他の会派や無教会などを含めた「内地」との各種交流も盛んに行われていた。戦時中には、福建語や北京語を解する台湾人も多くいたため、いわゆる大陸伝道の最前線に赴いた牧会者や神学生も多く出現したのであった。

1945年の敗戦によって、こうした関係も強制的に断絶された。日本に代わる新たな統治者となった中華民国国民政府は、直後から本拠地の中国大陆において共産党との内戦に明け暮れ疲弊していた。台湾統治の初期から「二・二八事件」（1947年）と

¹²² 『基督教世界』第3336号、1978年5月10日、1面。

呼ばれる反政府蜂起を発生せしめるに至った収奪的な支配をおこない、キリスト教界指導者にも犠牲者が出た。49年の大陸放棄に前後して蒋介石率いる国民政府が数百万の軍人とともに移転してきたが、翌年に勃発した朝鮮戦争によって台湾は極東の防共最前線の一環に位置していたがゆえ、米国による支援を受け続けることが可能になった。更に蒋介石・宋美齡夫妻はじめ、相当数の要人がクリスチャンだったこともあり、キリスト教に対しては一反共的な意味合いも込めて一友好的かつ籠絡的な態度が取られたのである。

かたや、旧宗主国であった日本キリスト教界の台湾に対する関わり方は、低調であった。敗戦後にあつて、山地伝道に勤しむ牧師やインテリ層における無教会の交流などは例外だったと思われる。戦後の教界雑誌を眺めていると、関心の対象はむしろ共産党が天下を取った新しい国家、すなわち大陸の中華人民共和国におけるキリスト教に多く向けられた事実が浮かぶ。1963年には、日本基督教団と台湾基督長老教会との宣教協約が結ばれるも、後に日本基督教団側の紛争と混迷のため、実質的には殆ど機能しなかった。60年代までの時期において相互交流に熱心だったのは、日本キリスト教海外医療協力会などの実践派、あるいは日本海外宣教会や日本キリスト伝道会などいわゆる「福音派」に連なる人々だといえるだろう。

こうした流れの中で迎えた1970年代初頭であるが、奇しくも日台両国のキリスト教界は、この時期に大きな激流に巻き込まれた。日本側は教団紛争などに代表されるそれであり、台湾側は1971年の国連追放、72年のニクソン・ショック（米中接近）や日台国交断絶（田中角栄訪中）を契機とした情勢に対する怖れと懸念であった。台湾キリスト教界では長老教会などのメインラインを主軸に、様々な教派が各種チャンネルを探し出して、国際的な孤立を防止するための行動をとったのである。これに対して日本を含めた各国の一特に政治的には保守主義に立ち信仰的には福音性をより重視する立場をとる一プロテスタント側も、応答する姿勢を示した。73年に誕生した戦後初の日本語礼拝を担う人々の群れも、多くはかかる立場に連なっていた。台湾の場合は、政権側にとってもこの動きは歓迎すべきものであったといえよう。

他方、同じく長老教会のなかでも70年代初頭の台湾が直面した苦境を目の当たりにして、〈預言者的役割〉を担う事こそが宣教的使命であるとの自覚を深める人々も、〈苦難〉の現場から発言を開始した。こうした中で長老教会は、71年12月に台湾の将来は本省人（古くから台湾に居住する住民）と外省人（蒋介石らと共に台湾へ移住してきた住民）を含めた人民の意思によって決定すべきだという「国是宣言」を発表した。「反攻大陸」こそが自らの使命だとする政権側からすれば、好ましからざる傾向である。しかし、いわゆる「社会派」を含めた日本側の反応は、非常に緩慢であった。

第4節 70年代交流史における二つの類型

以上の経緯を踏まえて〈1978年〉の日台キリスト教界交流史を見直すと、わたくしたちはそこに二類型の認識パターンを発見することが可能である。繰り返しの引用となるが、再度確認しておこう。

ひとつは、戦後台湾における強権支配の当事者たる蒋介石率いる政権への評価をめぐる日台両国教界のシンクロ現象である。たとえば、蒋介石歿後の77年8月に来日した頼炳炯牧師は、説教で次のように語る。彼は戦時期に日本留学の経験を持ち、聖經公会（聖書協会）主任より中華民国国際伝道会理事長に転じた73年には、直ちに台北の日本語礼拝再開に尽力した知日派牧師であった。

現代一番大きい危機は何でしょうか。それは共産主義と自由主義の戦いです。有神と無神とが戦っているということです。大陸には教会は沢山ありましたがでも今では教会の働きは許されず信者は大変困っています。……なぜ共産は孔子を攻撃したりするんでしょう。それは孔子は天の神様を拝んでいるからです。だからもしまだ天があるとしたならば、共産の頭は世界の神様の下にありますからそれはできないんです。日本の戦争当時もそうでした。「天皇が偉いか、キリストが偉いか。」と問われ、「キリストです。」と答えて獄一年です¹²³。

日本の支配と共産体制に共通する問題点を批判し、暗にそこから台湾を遠ざける現政権の働きを是認するがごとき筆致である。また翌78年4月5日、蒋介石総統召天三周年記念会に列席した益田泉を団長とする訪問団の動きは、次のように報じられる。

蒋介石総統三周年追恩合同礼拝が挙行されるにあたり、益田泉女史を団長とする一行、二十二名は、日本キリスト伝道会々長島村鶴龜師のメッセージを携えて行って参りました。四月五日、夕七時三〇分より礼拝は台北市内のメソジスト教会で行われ、参会者、約五百人、ちょうドルーテル・アワーラジオ牧師、正木茂師を中心とする台湾伝道ツアーの一行と合流して日本人勢は総勢三十名程でした。合同礼拝委員長雷法章先生（総統府国策顧問）をはじめ、特別に双連教会の名誉牧師、陳先生御懇篤なる御配慮により、前方に特別な座席を与えられた我々は、……。引続いて、益田泉女史が立って、約五分間に亘り、蒋介石総統が日本の為に、いかにキリストの愛を以て、御配慮下さったかについて語り、今日の日本の繁栄が、全く蔣総統のあの時の愛の決断に由来することを述べ改めて、感謝

¹²³ 頼炳炯「現代における人間の危機」、『日本をキリストへ』第六四号、一九七七年九月一日、一頁。

の辞を重ねました¹²⁴。

この訪問団は、日本敗戦後の邦人居留民内地引揚げ、あるいは1952年の日華平和条約締結時の賠償請求放棄などを、クリスチャン政治家・蔣介石による「愛敵」精神の発露の賜物であると讃えているわけだが、この記事を書いた加藤正義は、ほかにも『日本を今日あらしめた蔣介石総統の恩情』というトラクトを刊行して顕彰活動を進めた。これと前後して、賀川豊彦の右腕として働き戦時中は南京で牧会していた黒田四郎牧師、やはり戦時下華北で伝道活動に従事した伊藤栄一牧師、またクリスチャン作家として名高い三浦綾子など、いずれもこれと共通した評価を公にしている。要するに、70年代後半キリスト教界にありがちな台湾観なのであった。

もうひとつの類型も、実は同じ時期に誕生しはじめる。1978年12月初旬に日本基督教団総幹事の中嶋正昭牧師が、台湾を訪問した。長老教会台湾神学校で開催された宣教協議会への参加が、主たる目的である。だが特に先にみた「国是宣言」に続く「われわれの呼びかけ」（75年11月）、「人権宣言」（77年8月）が示すような姿勢、すなわち「台湾の運命を大国の取り引きの材料にするのではなく一千七百万の台湾住民の意思によって決定させよとの訴えをするとともに、三十年来戒厳令の下に弾圧政権をとっている国民党政府に対し、総選挙の実施を含む民主化を要求し」た結果、「国民党政権の逆鱗にふれ……、弾圧の手はますます厳しく、教会指導者の海外旅行は全く許可がおりず、次第に世界教会の交わりから締め出され」つつあった台湾基督長老教会を、欧米アジアの姉妹教会の代表とともに励ます意図をも籠めていた。そして、名目上の協約こそあるが実際の関心や交流が殆ど見られなかった台湾に着目しようと、中嶋総幹事は強く訴えたのである¹²⁵。

別の角度から眺めると、もうひとつの隣国・韓国における民主化闘争を支えるキリスト教界との連帯を説く流れの延長線上にある動きだ、と読む事も可能であろう。余談ながら、中嶋正昭牧師は1959年に旭川六条教会で結婚した三浦光世・綾子夫妻の司式者であり、たとえ異なった時事認識を持つに至ったにせよ、牧会者と信徒の間の絆は強かったであろうことは、想像に難くない。

このように、日本キリスト教界の台湾観には大きな相違が確認されるのである。これがまさに〈1978年〉の時代的な特色であった。これらの事実について、本節では再度確認しておきたいと思う。

第5節 棟方文雄がみた台湾

¹²⁴ 加藤正義「台湾の報告」、『日本をキリストへ』第71号、1978年4月10日、4頁。

¹²⁵ 中嶋正昭「台湾教会との連帯を－台湾長老教会を訪問して」（『教団新報』第3917号、1978年12月23日）4頁。

さて、それならば棟方が示した台湾観とは、はたしていかなる内容であったのか。

共産党との内戦に敗北する過程で台湾に避難した国民党（＝台湾政府）について、大陸の「奪還を夢見て」いるがために、「国論の統一に必死の姿が島中行く先々で見受けられた」模様から、棟方のレポートは始まる。だがそこには、「反共」云々あるいは信仰の自由を抑圧する「敵」云々といった叙述は見られない。というよりも棟方はむしろ、台湾住民の〈懷疑〉を発見している。すなわち、「在来の住民－山地人を含め、漢民族に属するいわゆる本島人達－は必ずしも政府の呼号にはおどっていない」現実であり、その背後にある「共産軍に追われて台湾にきた軍を彼らが『吾々の解放者としてではなく支配者として来た』と感ぜざるを得ない」複雑な歴史である。ことに棟方は、これが戦後の一過的な現象ではなく、鄭成功以来、台湾を厄介視して来た大陸の姿勢にあると捉えた。

戒厳令下であることを理由に、30年前に大陸で選出された国会議員が万年議員として立法を牛耳るがごとき現状に対して、「猫の首に鈴をつける」役割を率先して担った台湾基督長老教会の役割を彼が高く評価している点に、是非とも注目されたい。さらに、当時の国是であった「本土反攻」についても、さりげなくその「不可能」性を述べている。したがって、政府の逆鱗にふれながらも「人への愛を基とした人権擁護、議員の改選、ひいては台湾自主独立を主張して既に三度も声明を出している」長老派に、「殉教の気迫すらあるのを感じた」と、信仰者の表現を用いた最大限の賛辞を送るのであった。

さらに、このあたりが近年の単細胞で身勝手な観察者の巷論と全く異なる点であるが、こうした台湾の苦闘のプロセスにあって、植民地支配のみならず「道徳の退廃」という忌々しき現状に最も貢献している張本人が、ほかならぬ日本であることに對する告発も、彼は忘れてはいない。

この訪問記自体は、隣国にある「飢えた魂をどうするかということは広く世界教会の課題であろう」ことを説き、「ポルトガル人がはじめ『イラ・フォモーサ』（美しい島）と呼んだ」台湾の教会が、「よき働きをし、その名の如く神の御手のまゝの美しい島となるよう祈り度い」という祈禱によって結ばれているが、前節で述べた通り、わが国の福音派は蔣介石万歳の時代であり、社会派にとっても台湾との交流など殆ど関心がなかった時代の見解であったことを、わたくしたちは知るべきであろう。

なお、棟方による台湾観が如何に特異な内容であったのか、わたくしたちは日本基督教団西宮教会が発行する『ユーラクロン』のバックナンバーを繙き分析することにより、より鮮明に理解することが可能である。以下に、これを一瞥しておきたい。

棟方文雄「牧会日誌にかえて」¹²⁶には、月日の記載こそ無いものの、台北到着後の幾つかの記載がある。台北からバスで彰化に移動し、恐らくはイエズス会のリトリ

¹²⁶ 『ユーラクロン』第92号、1978年5月28日。

ート施設である「静山修道院」を会場に開催された日本・韓国・台湾による「東アジア三国宣教協議会」に参加することが、今次の台湾訪問の目的であったと、彼は記す。

この会議は 1973 年、台湾キリスト教界がちょうど国際的な孤立に直面した時期に結成され、反共を旗幟の一つとして掲げる組織であったが故に、台湾政府との関係性も比較的良好であった。先に登場した頼炳炯牧師はじめ、長老教会総会第 23 代議長であり 1963 年 9 月から同志社神学部留学経験を持つ莊経顕牧師らも参加し、台湾側主席を担っていたのは東京神学大学で 1965 年に修士号を取得した胡茂生牧師であった。会議終了後の一行は台南へと移動し、同地の名門・長老教会の太平境教会で催された歓迎会に出席した後、山地伝道に赴くグループもあったようだが、棟方たちは英領香港へと向かった。

そして、教会員向けのより本音を語るだろう訪問記には、以下のような印象が記録されている。

民衆に今こそ平和への希望を与えなければならぬと必死に活動を続ける教会ではあるが、戦争を恐れ、海外に移住する台湾人の数はあとを断たない。台北のある教会でも既に三十数家族が米国に移ったという。それに何処も観光事業ブームで、目玉商品視されているのが売春で、それは市中のホテルまでおしかけてくるといふからすさまじい。一方年々十萬程の受験者に対して大学に入学出来るものは一万五千程度とか。学校の数不足し、多くの青年達は海外渡航を夢みるか、前途に失望、不道德な道に落ち込んで行くというのである。こうした人心の退廃に向って国を捨てず台湾にとどまり教会を守る指導者達に我々は殉教者の気魄を見る思いがしたのである¹²⁷。

手元にある史料は、これ以上の事柄を語ってはくれないが、ここで多少の私見を述べてみたい。

第一に、78 年の棟方訪台は孤立化を恐れた台湾キリスト教界が 70 年代に推進した積極的対外交流を担った「東アジア三国宣教協議会」による招聘によっていた。棟方は前年の 77 年にも、同志社同窓である稲垣守臣牧師に誘われソウルで開催された大会に参加、三十数年振りの「京城」を熟思しているのだが¹²⁸、実はこの協議会の日本側パートナーは、前記した蔣介石召天三週年記念礼拝でみた日本キリスト伝道会であった。

¹²⁷ 棟方文雄「面白うてやがて悲しかった旅」(『ユーラクロン』第 93 号、1978 年 7 月 9 日) 30～31 頁。

¹²⁸ 棟方文雄「ソールを見る」(『ユーラクロン』第 88 号、1977 年 9 月 25 日)。

同会は、ホーリネスの系譜にある日本基督教団小松川教会の原登牧師が米国留学中に与えられた啓示を実現すべく、在米日系人クリスチャンの支援も受けながら構想された団体であり、1963年に島村龜鶴牧師を会長に、大阪女学院の西村次郎氏を副会長にして発足した。超教派の教会に向けた支援を目的とする活動が行われ、国内のみならず海外伝道も積極的に担い、折しも激化する教界内の紛争に対しては反対する立場を貫き、逆に大阪万博キリスト教館運営には積極参与する姿勢を示した。エヴァンジェリストとして平松実馬・伊藤栄一・益田泉・武藤富男・福井二郎らの諸氏が名を連ねる、いわゆる保守的「福音派」の団体だと思われがちだが、賀川豊彦の愛弟子である黒田四郎牧師や聖隷クリストファーの創始者である長谷川保師なども参画しており、〈世俗の左右〉では語ることができない働きをなしたのである。ちなみに、棟方牧師が79年春から開拓伝道に赴いたケルン＝ボン日本語教会を支える運動の事務局も、同会本部がある小松川教会に置かれている。

したがって第二に、即座に想起される文法に従うのであれば、同じく「戦責告白」や「教団紛争」に対しては厳しい視線を注いでいた棟方文雄牧師の思想と類似した面があると思われるのだが、棟方は小文で見た通り殆ど同じ時期に台湾を訪問した彼／彼女らの見解とは、まったく正反対の台湾観を公表していたのである！

しかもそれが、教団総幹事・中嶋正昭牧師の台湾訪問—これを契機に教団と台湾基督長老教会との新たな宣教協力への道が開かれ、1980年代初頭に逮捕された長老教会・高俊明牧師の釈放運動などが繰り広げられた—よりも、ひと足はやい時期になされた事実に、わたくしたちは注目する必要があるだろう。

だが第三に、かといって棟方文雄は、台湾問題を〈他者の苦難〉としてのみ捉えていたのではなかった。台湾に続いて英領香港・葡領マカオへでの交流と視察を重ねた旅程において様々な苦悩と矛盾の現場を発見しているが、徳川禁教後に落ち延びた日本人切支丹殉教者墓地をカーロン島で目の当たりにした最に漏らした感嘆にこそ、棟方が「台湾」でみた本質が表れているだろう。次の一文を熟読されたい。

それにしてもそこまで信仰を貫くという伝統が今の教会に果してあるのか、何時何処で日本人はそうした誠実さをおき忘れてしまったのかという悔恨と懺悔の気持ちに迫られて少なくとも私はこの島を後にした¹²⁹。

化外の地といわれし島と海山の

幸いやさわに 今独立んとす¹³⁰

¹²⁹ 棟方文雄前掲「面白うてやがて悲しかった旅」、33頁。

¹³⁰ 棟方文雄「牧会日誌にかえて」（『ユーラクロン』第92号、1978年5月28日）41頁。

台湾の動向はその後、まさに棟方が予想した通りの道筋をあゆみ、現在を迎えている。だが小文で、その先見性の素晴らしさを讃えるような評価を下しても、ほとんど意味を持たないだろう。むしろ筆者は、そこに解放や連帯とは異なる次元の課題を見いだした棟方文雄の姿勢を再考する契機が所在することを強調したいと思う。すなわち、「遺言書を懷に」しながら「殉教の気迫」を誠実に示す台湾教界指導者たちは、彼にとっては様々な闘争や運動によって信仰の貫徹から逸脱した日本の教会が回復すべき手本と見たのである。世事多難な時代にあって、あくまでも〈教会〉を第一義的前提として世界を見渡した棟方らしい「台湾」観といえるのではなかろうか。

第6節 教会人と世俗の問題について

本章で確認した通り、棟方文雄が1960年代後半から70年代に示した様々な言動を世俗的なモノサシのみで解読したとするならば、恐らくは蒋介石の営為や行動を讃えた人々のそれに類似すると予測されたのだが、実際はそうではなく、むしろその支配の延長線上に位置する現体制を厳しく批判する内容であった。様々な状況証拠を通じて信仰的には近い関係にあるだろう保守的な牧会者たちとも、まったく異なる評価だったのである。

そしてそれは、日本キリスト教界の台湾に対する関心が非常に低調だった時期、数次に互って困難な宣教に従事した無教会の指導者・高橋三郎による台湾観と通底した発想によっていたことを、最後に紹介したいと思う。高橋は、官側からの有形無形の圧力をものともせず70年代史的文脈の中で「反体制」へと転じつつあるグループとの交わりを重ねたが、その意義について次のように語る。やや長いが、引用してみよう。

戦後日本のキリスト者は、戦前の挫折を深刻に反省した結果、かつて戦うべき時に戦いを回避したという、あの過ちを二度と繰り返さぬよう、これからは戦わねばならないのだ、という自覚を抱きました。……しかし、惜しいことに、「戦い」という言葉の中にこもる内容として、権力に対する批判と抵抗という否定の面のみを、一方的に強調し、そこに全力を傾注すべく決意したように見える一面があります。

しかし福音による戦いは、「罪の赦し」ということ自体がすでに明示しているように、単なる否定と抵抗のみに終るものではありません。新しい御国の完成をめざす神の御業は、地上の歴史的展開においても、常に和解への可能性を探り、統合への基盤を新しく提示するという過程を、必然的に伴うのでありまして、すでに繰り返して述べて来たように、被抑圧者であった初代の信徒たちが、王のために祈ることによって、ついにはローマ帝国統合の基盤として機能するに至った

ということも、まさにこの事実の一環としてとらえるべきものでありましょう。あの巨大な歴史の動きをかえりみると、私はここにも、キリスト者のみ担いいうところの、そしてまたキリスト者こそ担わねばならぬところの、新しい課題が横たわっていることを、思わずにはいられないのです。

この事実を確認するとき、実はあの台湾の友人たちが、まさにこの課題を担うため、決然として戦いへの一步を踏み出したのだという事実は、ますますわれわれに対する問いかけでもあることを、思わずにはいられないのです。

そして彼らの戦いに連帯しようとするとき、それによってわれわれが、彼らを何かの形で援助するというよりは、むしろ彼らの存在そのものを通して、われわれこそ多くを学び、日本人として負うべき課題の所在を、新しく教えられて来たというのが、私の偽りなき感想でありまして、私はそういう意味においても、台湾の友人たちとの間に、深い友情を与えられてきたことを、心から感謝せずにはいられないのです。それは単なる人間的な親しさに終るものではなく、私に向って天から注がれる祝福の進路としての役割すら、果すものでありました¹³¹。

クリスチャンの世俗への参与という古くて新しき問題を思考するに際して、かかる信仰的な姿勢、また棟方が示した仲間うちでも決して迎合しない在り方、別言すれば思想・信条の既製品「セット買い」を避けて己が納得するそれを探りかつオーダーメイドするがごとき姿勢は、迷い多き世にあるわたくしたちの生き方に対しても、大いなる示唆を与えてくれるだろう。

同時代の日本を見つめて呟いた「我々は教会人の政治運動がそのまま不信仰であるなどと思っている者ではない。ときには、むしろその生き方に賜物を感じ感謝の気持ちすら持つものである。しかし教会には『もっぱら祈りと御言のご用に当る』人々も必要なのである。否、むしろより必要なのである。それが『政治的に行動しない』などという理由から、教会が封鎖されたりしているのは、どういうことであろうか」¹³²という棟方文雄の嘆きの真意は、未知の土地を訪問した瞬時において、見事に発露されたのであった。

むすびにかえて

本稿で論証した内容を、簡単に纏めておこう。

- ① 「秘話」誕生に深く関わった三人のうち、賀川豊彦と近い関係にあった発信者は

¹³¹ 高橋三郎『神の国と地の国』（創文社、1977年10月）168～169頁。

¹³² 『西宮教会百年史』1985年、238頁。

黒田四郎のみである。実体験として語られた感動的な「物語」は1977年1月に産声をあげた。

- ② 三浦綾子の場合、エッセイに登場する牧師や伝道者との交わりの中で、日本キリスト伝道会に関わる人物―恐らくは伊藤栄一牧師―からこのエピソードを聞く。そして、1977年12月における初出には無かった「秘話」を、1978年12月に『天の梯子』が単行本として出版されるまでの期間に加筆したのである。そして、この作品は「物語」が人口に膾炙する発端となった。
- ③ これと同じ時期に、加藤正義も同会での交わりを通じて「物語」に接しており、1978年4月に台北で開催された蒋介石召天三周年礼拝への参加を契機に、自ら牧会する東京伝道館のトラクトとしてこの「秘話」をまとめ、各方面へ配布して今日にまで伝承された。

これこそが、「1939年12月の南京云々」という「秘話」誕生の、客観的な過程なのである！

擱筆に先立ち、「物語」を支えた人々について、その経歴をざっと整理しておきたい。氏名と生没年、及び1970年時点における満年齢を記した後、「秘話」が語る戦時期の動向を中心にまとめてみた。

※ ※

(1) 金井為一郎 (1887～1963) 故人 (83 歳)

日本キリスト伝道会初代会長に推されていた彼は、神の国運動中央委員を務めるなど、賀川と近い間柄にあった。また、金井為一郎『支那開拓伝道者 ハドソン・テーラー 傳』(日曜世界社、1936 年)にある如く海外伝道にも関心を持ち、金井為一郎「奨励」(日本基督教聯盟編『皇紀二千六百年と教会合同』基督教出版社、1941 年)では、国策への協力を鮮明にした。

(2) 黒田四郎 (1896～1989) 74 歳

戦時南京での伝道と敗戦後の引き揚げを経て、ふたたび賀川伝道で活躍した。

(3) 福井二郎 (1899～1983) 71 歳

1935 年以降、富士見町教会に本部を置く満洲伝道会より熱河伝道に派遣された。数多くの犠牲者が出るも、自身は戦後に無事引き揚げた。

(4) 島村龜鶴 (1900～1993) 70 歳

日本キリスト伝道会会長であった島村は、1938 年に旧日基富士見町教会に赴任して、三吉務牧師の下で牧会。周知の通り、単なる日本基督教会の名門教会であるのみならず、ここにはクリスチャン将軍・日正信亮(1858～1940)が組織した満洲伝道会・東亜伝道会の本部も置かれていた。

(5) 平松実馬 (1903～1972) 67 歳

日本キリスト伝道会エバンジェリストとしても活躍したが、戦時期は平松実馬『感激の大陸慰問を終へて―皇軍慰問旅行日記』(土肥書店、1940 年)にある通り、大陸各地

を慰問して、南京では黒田四郎に会っている¹³³。更に 1943 年 11 月。第二回日本基督教団総会で、平松が軍用機献納の決議案を提出し、満場一致で採択。1943 年 12 月末、「今や教團の軍用機運動は燎原の火の如くに拡大し、白熱化してゐます。教會がこの運動により靈的に目覺め信仰の大躍進を來たしておるのです。身命を皇國に捧げ死闘血戦、南方の海に散り行く將兵を思ふ時我等はいかにしてもこの事の完遂を果たさねばなりません。飛行機を、飛行機をと叫びつつ、戦死せし英靈に今こそ私共は應へなければなりません」との呼びかけが、平松実馬名義で全国の教会とキリスト教学校に送付された。献金を用いて教団は、海軍二機、空軍二機を献納している¹³⁴。

(6) 武藤富男 (1904～1998) 66 歳

東京帝国大学法学部卒業後、東京地方裁判所判事に任官。1934 年に渡満し、満洲国司法部刑事科長、国務院総務庁弘報処長、満洲国協和会宣伝科長を歴任した。1943 年に帰国し、情報局第一部長に就任。武藤富男『満洲讃歌』（新京：吐風書房、1941 年）がある。

(7) 伊藤栄一 (1904～1995) 66 歳

1941 年 2 月～3 月にかけて北支慰問（石川義一「北支に使して」(一)～(三)、『日曜学校』第 28 巻第 4 号～第 6 号、1941 年 4 月～6 月）に遣わされ、戦時下の北京日本人教会牧師、日本基督教団華北布教区常置委員を任じた。

(8) 益田泉 (1908～1983) 62 歳

丹羽平三郎（東洋宣教会）牧師の次女で結婚後に大連在住、敗戦後に戦犯としてシベリア抑留を経て帰国。

(9) 林自西 (1905～1980) 65 歳

1936 年に父とともに日本へ赴き材木業に従事し、帰国後に嘉義でベニヤ板製造を開始。戦後に林商號を創業し、その利益を教育や社会事業に注入した¹³⁵。

(10) 賴炳炯 (1913～2015) 57 歳

1936 年に台南神学院を卒業後、植村環の推薦を得て日本国内を視察。1941 年から 43 年の期間、東亜伝道会によって金門島に派遣され、上與二郎・大川正・中野収、莊丁昌らとともに厦門の宣撫工作に従事していた¹³⁶。

¹³³ 平松実馬記念会編『平松実馬とその足跡』（キリスト新聞社、1973 年）93 頁。但し年譜では慰問伝道こそ紹介されるも、報告書の内容は語られていなかった。

¹³⁴ 軍用機献納運動の全体像は、森田喜基「日本基督教団における軍用機献納運動」（『福音と世界』第 72 巻第 8 号、2017 年）を参照。

¹³⁵ 「林商號合板股份有限公司」国家文化記憶庫 [https://tcmb.culture.tw/zh-tw/detail?indexCode=online_metadata&id=630872：最終閲覧日 2024 年 4 月 20 日]。

¹³⁶ 賴炳炯口述・黃莉雯編撰『凡事感謝－賴炳炯牧師傳道記事』天恩出版社、2011 年 1 月）30～35 頁、及び盧啓明『傳道報國－日治末期臺灣基督徒的身分認同（1937 -1945）』

(11) 郭維租 (1922～2022) 48 歳

1942 年に東京帝大医学部に入学して、矢内原忠雄の門下生となる。帰国後の 1946 年に台湾大學医学院第一内科助手に就任し、ハンセン病患者救済に奔走した¹³⁷。

(12) 胡茂生 (1925～2012) 45 歳

彰化青年師範学校在籍中に学徒出陣を経験し、前線で地獄絵図を目の当たりにして、生きながらえたなら牧師として献身する決意を抱く。戦後に台南神学院に入学し、1964 年には東京神学大学で研修した¹³⁸。

(13) 高俊明 (1929～2019) 41 歳

1942 年に青山学院中等部に入学し、敗戦翌年に帰国、長榮中学に編入学。1953 年に台南神学院卒業後、山地伝道を志願して 1957 年には玉山神学院長に就任。1970 年に長老教会第 17 代議長に就任した¹³⁹。

※ ※

かかる登場人物の横顔を確認した上で、本稿全体の結論を急ごう。

第一に指摘すべきは、「秘話」を支えた人々は当時 60 代を越えた古い世代を中心としており、かつ時流を懸念する立ち位置にあった。すなわち、①「造反」や「ゲバルト」の教会内への波及¹⁴⁰、②反米／反戦運動に見える共産勢力の浸透、③己らの過去を裁く可能性がある鈴木正久（1912～1969）教団議長名で公表された「戦争責任告白」、などがその危惧の対象であった。

台湾側も未だ、蒋介石や宋美齡を公然と批判できる状況にはなかった。事実、林自西や頼炳炯・郭維租など、何れも当局との摩擦を避けて活動をしていた。別言すれば、蔣家の「聖家族」的なイメージは保全されていたのである¹⁴¹。

（秀威出版、2017 年）149～150 頁を参照。

¹³⁷ 郭維租（宮村宏一）「私の戦争体験と人生の転機」（『鉄門だより』2015 年 11 月号）、及び赤江達也「帝国日本の植民地における無教会キリスト教の展開」（『社会システム研究』第 29 号、2014 年）を参照。

¹³⁸ 胡忠仰「我的父親胡茂生牧師」2012 年 9 月 13 日、頼永祥長老史料庫
[<http://www.laijohn.com/archives/pc/Ou/Ou,Bseng/about/Ou,Tsin.htm>：最終閲覧日 2024 年 4 月 20 日]。

¹³⁹ 連碧玉「敬愛する高俊明牧師を偲んで」2019 年 9 月 4 日、玉蘭莊文章分享
[<http://www.gyokulansou.org.tw/f2/index.php?load=read&id=534>：最終閲覧日 2024 年 4 月 16 日]。

¹⁴⁰ 小出忍『ホーリネスの群略史』（ホーリネスの群事務所、1974 年）は、本稿でみた日本キリスト伝道会の時局観と同じくこの時代の動向を激しく批判している。

¹⁴¹ これと関連して、現在では台湾独立運動の父として知られる李登輝（1923～2020）第 4 代中華民国総統の場合も、1980 年代の奨励においては蒋介石の信仰に対する高い評価

第二に「秘話」は、①明治学院、②四国や関西、東京下町、③イエスの友会やイエス団を中心点とする複数の円のなかで増幅したように思われる。すなわち、すべて賀川豊彦の軌跡と重なる「現場」であり、要するに同労者や後継者たちが物語の拡散に大きく貢献したのだ。

これに関連して、教団天満教会員でキリスト新聞社監査役などを歴任しながら文書伝道に貢献した田中芳三（1919～2013）をめぐるエピソードはたいへん興味深い。ある牧師による賀川批判を耳にした田中は激怒し、「何が今の伝道者をこのような無認識な人物にしているのだろうか！このような伝道者のために、またこのような牧師によって毒される信者のために、本当の賀川先生の姿を後世に残す責任と使命が自分にあると感じるようになった」と決意を新たにす。「賀川豊彦が不当に評価されていることに対するプロテストの場こそが」多くの刊行物であった¹⁴²、というのだ。1970年代半ばに始まる所謂「賀川問題」が「秘話」誕生を後押ししたかどうかは、推測に難くない。

そして第三に、上記 13 名のうち日本側人物の多くは、戦時期の大陸経験や戦後の引揚経験を共有している。また平松や武藤の場合、先の「戦責告白」により晩年の立場が危うくなる恐れもあった。ゆえに、若い世代の「造反」には耐え難き屈辱を感じたのではなかろうか？

台湾側の登場人物も、見事に日本経験が共有される。特に年長者の場合、独裁体制下にあつて過去の「通敵」を糾弾される不安を秘めていたのかもしれない。

このように、当たり前ではあるが歴史を語る人々の背景を精査し、更に歴史学徒として誰しもが受けるであろう「史料批判」の手続きを踏まえたとき、「美談」や「逸話」は初めて利用価値の軽重が判断できるのである。

※ ※

最後に、方法論についてひとこと申し述べたい。本稿は、歴史学の基礎たる文献実証の方法にのみ基いて議論を進めた¹⁴³。要するに「秘話」は、1970 年代の時代状況を危

を公言していた。その一部は、李登輝『愛と信仰－わが心の内なるメッセージ』（早稲田出版、1989 年）に邦訳されている。

¹⁴² 廣澤昭一「クリスチャン・グラフと田中芳三」（『「クリスチャン・グラフ」等に見る太田俊雄』敬和学園高等学校、2010 年）368 頁。

¹⁴³ 本稿と関わる「以德報怨」政策について、①抗日戦争勝利後の段階では戦時賠償を求める内容であったが、大陸での形成不利、台湾への避難、そして中国共産党との対峙など情勢の変化に応じて変容したこと。②対日講和ギリギリの段階まで様々な検討がなされたこと。③最終的には米国の庇護下で日台「反共」盟邦関係の樹立を選択したことが既に明かされている。詳細は、黄自進「抗戦結束前後蒋介石的対日態度」（『中央研究院近代史研究所集刊』第 45 期、2004 年）、及び家近亮子『蒋介石の外交戦略と日中戦争』（岩波書

惧した黒田四郎らによる集団的な創作であると結論せざるを得ないが、ここで善悪の判断はしていないことにも着目されたい。別言すれば、当事者たちが「如何なる想いを胸に秘めてこの物語を世に送り出したのか？」という次元は、これらの文献だけでは論証することができない。かかる「心性史」的側面に思いを致すため、煩雑さを顧みず各人の年齢や履歴などを、なるべく詳細に併記した次第である。また、宣教上の妥当性などについても、まったく考察の対象外に置いている。読者諸賢によるさまざまな助言と厳しい批判を期待したい。

(了)

【謝辞】本稿は、公益財団法人 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成を受けて執筆されたものである。コロナ禍にあって当初の計画は大幅な変更を余儀なくされたが、長期間にわたり自由闊達な活動への従事を許容して下さった関係各位に、心からお礼を申し上げます。

店、2012 年)などを参照されたい。